

甲府市文化財調査報告 2

山梨県甲府市

史跡 武田氏館跡 I

昭和55～57年度発掘調査報告書

1985

甲府市教育委員会
生涯学習部文化芸術課文化財係

甲府市文化財調査報告 2

山梨県甲府市

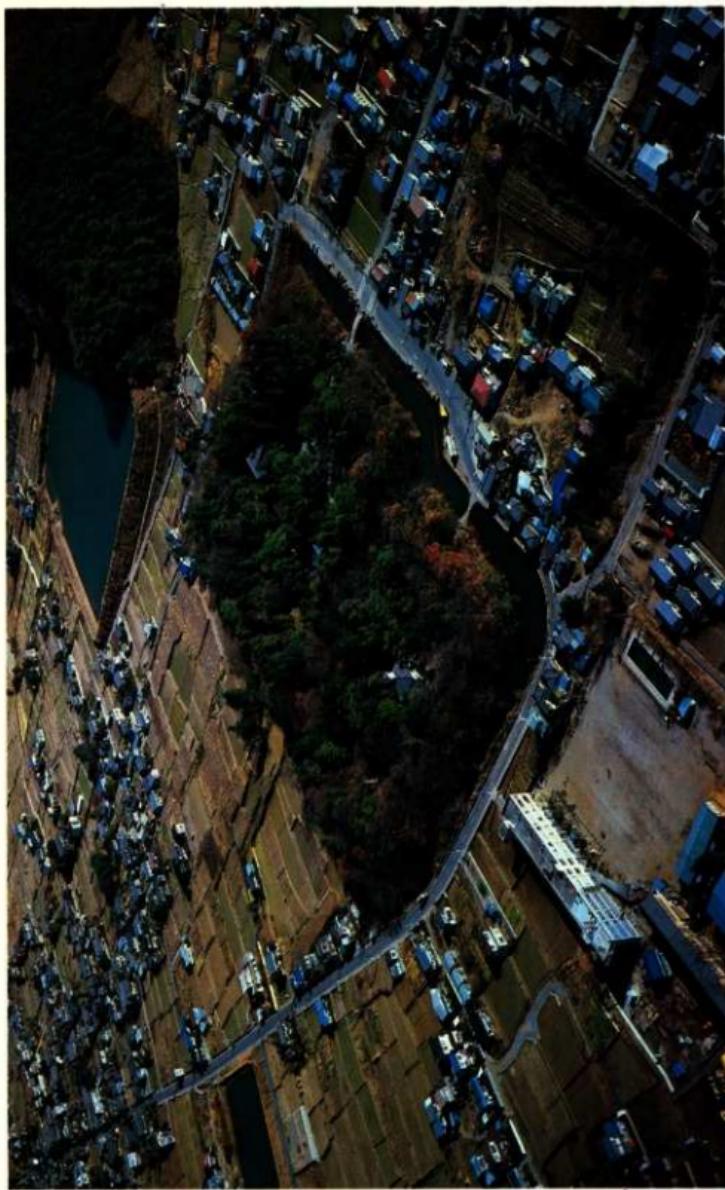
史跡 武田氏館跡 I

昭和55～57年度発掘調査報告書

1985

甲府市教育委員会

武田氏館跡





甲州古城勝賴以前図（惠林寺藏）

序

国指定史跡武田氏館跡内の現状変更を契機に昭和55年度から実施されてきた発掘調査も昭和59年度までに9件を数えるまでに至りました。これらの発掘調査は全てが現状変更を申請した方々の、文化財に対する深い理解と協力があったからこそ実現できたものであり深く感謝する次第であります。

これまでの発掘調査により土器や堀などの遺構が検出され、土師質土器や陶磁器、古錢などが出土していることは、武田氏三代の榮華と努力、そして家臣団の大きさを知るうえで非常に貴重な手掛りとなり、同時にこれらの資料から派生する問題は今後の考古学や歴史学上の課題でもあります。

現在の武田氏館跡の周辺は、南側を中心に宅地化が進み急速に発展しつつありますが、その地下に眠る武田氏三代の榮華と家臣団の生活の一端を探ることは、当時の社会や國家の歩みを理解することにつながります。さらにこのことは、現在の我々の生活・習慣そして社会や国家を理解していくためにも大切だと思います。

英雄を生んだ郷土に生きる者たちとしての誇りを持つためにも、また、この英雄伝を、孫子の代まで長く語り伝えるためにも、この報告書が広く活用されることを望んでやみません。

昭和 60 年 3 月

甲府市教育委員会

教育長 楠 恵明

例　　言

- 1 本書は山梨県甲府市古府中町・屏形三丁目・大手三丁目に所在する史跡武田氏館跡の現状変更に伴なう緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和55年度から県教委より引き継ぎ、55年度2件、56年度3件、57年度4件の合計9件実施した。整理作業は昭和59年度に行なった。
- 3 発掘調査及び報告書刊行に係わる経費は、国庫及び県費の補助を受けて行なった。
- 4 発掘調査は、甲府市教育委員会が主体となり、谷口一夫・信藤祐仁が担当した。
- 5 本書の作成は甲府市教育委員会が行ない、信藤・畠大介・伊藤正幸が執筆及び編集にあたった。執筆分担は、第1章(1)(2)第2章を伊藤、第3章(8)(9)の遺物の土師質皿形土器の部分及び第4章(2)を畠がおこない、残りを信藤があたった。なお、遺物の陶磁器の部分に関しては小林真・敏宏両氏の御教示を受けた。
- 6 遺物及び実測図は甲府市教育委員会で保管している。
- 7 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の諸氏及び機関の協力を賜わった。厚く御礼申し上げます。

山梨県文化課、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県立図書館郷土資料室、恵林寺、武田神社、ボイスカウト甲府第10団、中沢泉、野沢公次郎、幡野勝、安藤昭三、奥石俊郎、山田清、山本仁三、小沢香織、深沢芳三、梅沢公、長谷部喜文、小林真、小林敏宏、秋原三雄、數野雅彦、末木健、八巻与志夫、山谷健一郎、柳原功一、山根弘人、赤羽一郎、市河三次

(順不同 敬称略)

本 文 目 次

第1章 環 境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	3
第2章 館跡の構造と現状	4
第3章 各地点の発掘調査	7
(1) 調査の経緯	7
(2) 発掘地点	7
(3) A 地点	9
(4) B 地点	11
(5) C 地点	15
(6) D 地点	20
(7) E 地点	23
(8) F 地点	25
(9) G 地点	39
(10) H 地点	55
(11) I 地点	58
第4章 ま と め	62
(1) 梅翁曲輪について	62
(2) 土師質皿形土器について	63
参考文献	64

挿 図 目 次

第1図 武田氏館跡と その周辺の関係遺跡	2	第26図 E地点土層図	24
第2図 武田氏館跡概要図	5	第27図 E地点調査区平面図	24
第3図 武田氏館跡史跡指定地域 及び発掘地点位置図	8	第28図 F地点調査区位置図	26
第4図 A地点トレンチ配置図	9	第29図 F地点調査区全体図等	27
第5図 A地点Aトレンチ北壁土層図	10	第30図 F地点遺物分布図	30
第6図 B地点全体図	11	第31図 F地点出土土師質皿形土器(1)	31
第7図 Cトレンチ北壁セクション図	13	第32図 F地点出土土師質皿形土器(2)	34
第8図 B地点Aトレンチ 東壁セクション図	13	第33図 F地点出土鉢類	37
第9図 B地点Aトレンチ1号暗渠	13	第34図 F地点出土陶磁器	37
第10図 B地点1号暗渠下部	13	第35図 F地点出土古錢	38
第11図 B地点1号暗渠石除去部分 北側見通し図	13	第36図 F地点出土鉄器・その他	38
第12図 B地点Bトレンチ2号 暗渠平面図	14	第37図 G地点トレンチ配置図	40
第13図 B地点C・Dトレンチ平面図	14	第38図 G地点北壁土層図	40
第14図 C地点トレンチ配置図	15	第39図 G地点調査区全体図等	41
第15図 C地点Aトレンチ 南壁セクション図	16	第40図 G地点遺物分布図	43
第16図 C地点Aトレンチ 西壁セクション図	16	第41図 土師質土器法量比	43
第17図 C地点Bトレンチ南壁見通し図	17	第42図 G地点出土土師質皿形土器(1)	45
第18図 Bトレンチ東壁見通し図	17	第43図 G地点出土土師質皿形土器(2)	47
第19図 Bトレンチ西壁見通し図	17	第44図 G地点出土土師質皿形土器(3)	49
第20図 C地点出土遺物	19	第45図 G地点出土土師質皿形土器(4)	51
第21図 D地点トレンチ配置図	20	第46図 G地点出土陶器・鉢	54
第22図 D地点調査区全体図	21	第47図 H地点調査区全体図	55
第23図 D地点土層図	21	第48図 H地点土層図	56
第24図 D地点エレベーション図	21	第49図 H地点出土遺物	56
第25図 E地点調査区位置図	23	第50図 I地点調査区全体図	58
		第51図 I地点土層図	59
		第52図 I地点土層エレベーション図	59
		第53図 I地点上层セクション図(部分)	60
		第54図 I地点出土遺物	61

表 目 次

第1表	F地点出土土師質皿形土器觀察表(1)	32
第2表	F地点出土土師質皿形土器觀察表(2)	34
第3表	F地点出土土師質皿形土器觀察表(3)	35
第4表	F地点出土古錢觀察表	38
第5表	G地点出土土師質皿形土器觀察表(1)	44
第6表	G地点出土土師質皿形土器觀察表(2)	46
第7表	G地点出土土師質皿形土器觀察表(3)	48
第8表	G地点出土土師質皿形土器觀察表(4)	50
第9表	G地点出土土師質皿形土器觀察表(5)	52

写 真 図 版 目 次

図版1	A地点発掘調査トレンチ	図版17	F地点西側配石遺構
図版2	B地点発掘調査区等	図版18	F地点出土かわらけ陶磁器
図版3	B地点1号暗渠	図版19	F地点出土火鉢類
図版4	B地点2号暗渠	図版20	G地点水路
図版5	B地点C・Dトレンチ	図版21	G地点溝(1)
図版6	C地点調査区状況	図版22	G地点溝(2)
図版7	C地点Bトレンチ等	図版23	G地点遺物出土状況
図版8	C地点Aトレンチ等	図版24	G地点出土遺物(1)
図版9	C地点出土遺物等	図版25	G地点出土遺物(2)
図版10	D地点調査区全景	図版26	G地点発掘調査状況
図版11	D地点Aトレンチ	図版27	H地点出土遺物等
図版12	D地点B・Cトレンチ	図版28	H地点検出集石等
図版13	E地点調査区	図版29	I地点調査区等
図版14	E地点発掘調査状況等	図版30	I地点出土遺物等
図版15	F地点1次調査	図版31	武田氏館跡占縫図
図版16	F地点暗渠	図版32	甲州古城勝頼公以前図

武田氏館跡発掘調査組織

(○印は整理のみ)

- 1 調査主体 甲府市教育委員会
- 2 調査担当者 谷口一夫(日本考古学协会会员)
信藤祐仁(甲府市教育委員会)
- 3 調査員 伊藤正幸[○] 烟大介[○](甲府市教育委員会)
谷口吉郎 風間正雄 原一郎 久米雅生
(山梨考古学研究会)
- 4 調査補助員 川口純一 古家貴雄 板本覺
山田周平 滝本肇 小林厚美 吉田哲志
小松斉 織田享子 吉原茂樹 百広次
工藤重久 西川耕二 浅川晃治 山浦甲藏
小俣直久 長沢博司 望月雅夫 中村友幸
岩崎登加 望月公 手塚雅仁 中村恵子
小沢千恵美[○] 保坂牧[○] 雨宮明美[○] 山本歩[○]
水戸節子[○] 高奥浩明[○] 田村弘幸[○] 安留誠一[○]
野呂明弘 森岡久 三田村幹雄 橋山俊二郎
奥村剛 岡田充雄 塙原明彦 石原健次郎
依田正幸(山梨大学)
金山梨花 萩野幹子 矢崎晴美 内田真澄
深沢しのぶ 金谷玲子 中村宏美 鈴木千浪
根岸ひとみ 磯部佳世[○] 田草川茂美[○] 川合洋子[○]
清水紀美子[○](県立女子短大)
白鳥博之 浅川浩 柴田栄(山梨学院大学)
桑折礼子 秋田かな子(東海大学)
五味信吾[○](國學院大学)
戸田紳一郎 内藤貴弘
- 5 事務局 社会教育課長 久保田敏夫(56.4着任)
" 深沢厚(56.3退任)
文化係長 山本承功(58.5着任)
" 離井透(58.5退任)
事務吏員 石井丈司(57.4着任)
" 越中宏治(57.3退任)

第1章 環境

(1) 地理的環境

甲府市は市域の北側約4%ほどを金峰山を主峰とする秩父連峰により占められ、標高1,500m前後の山々が連なっている。この秩父連峰を甲府に向かって南に下ってくると山地が途切れる所は、通称山付き地帯と呼ばれ600~700mのピークが東西に連なっており、このピークを一気に100mほど下ると盆地が開ける。

東の笛吹川と西の釜無川およびその支流を構成する中小河川により開拓された甲府盆地は、これらの河川の扇状地あるいは複合扇状地および冲積原などにより形成されている。

甲府市内では、東から濁川、相川、荒川の3本の河川が流れ込み、懐の深い山付き地帯に扇状地を形成している。荒川と相川とは、荒川橋付近で合流するが、荒川扇状地と相川扇状地とは明確に判別することができる。一方濁川は市域の東側を南下し笛吹川へと流れ込むが、その途中濁川沖積原を形成している。

相川は、多良峰にその源を発し積翠寺・塚原・美咲・塙部などを流れ、飯田で荒川に合流する。この位置は湯村山と愛宕山とに挟まれた地域であるが、この相川扇状地上の扇央部に武田氏館跡は立地する。

武田信虎が守護大名から戦国代名へ成長する過程において、市域東南方の川田から居館を移築したこの地は、後世武田節にうたわれている「人は石垣・人は城」の独自の思想が示すとおり、自然地形を巧みに利用した要害の地であった。

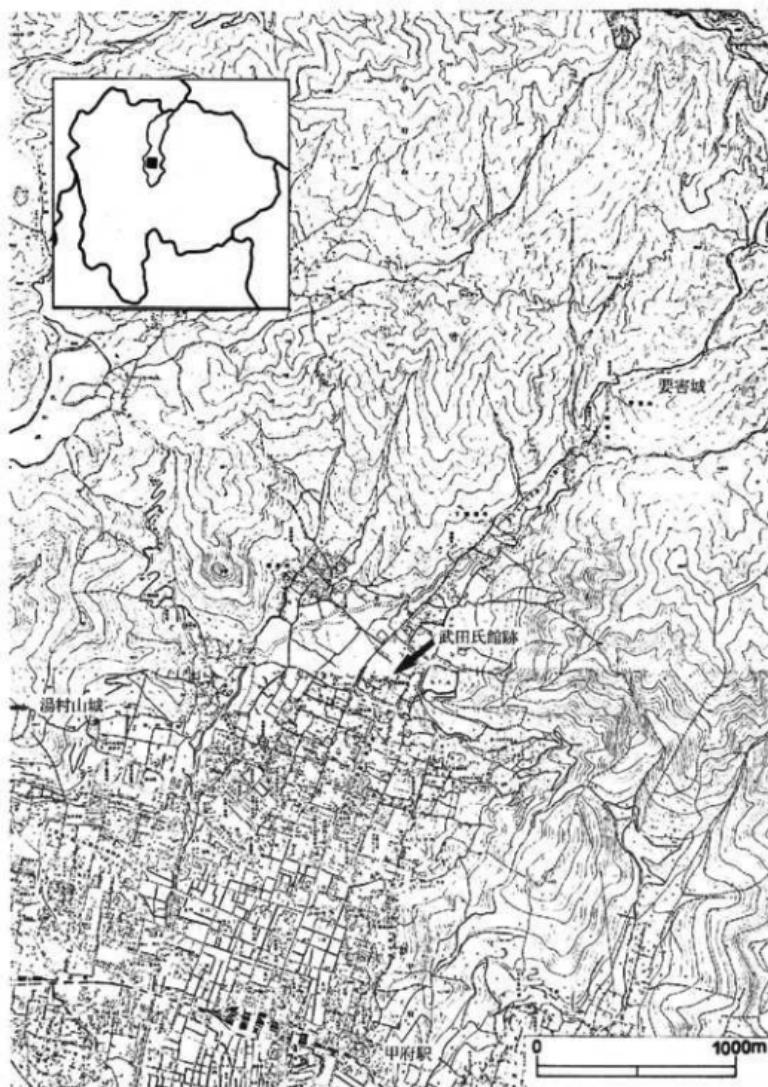
東・西・北を山地に囲まれたこの地は、南に甲府盆地を一望でき、反対側の曾根丘陵までを一望のもとに見渡せる地である。そして、東の愛宕山・夢見山、西の湯村山が「左右両翼の如く」張り出し、北方に丹那山系の深山を控えた要衝の地は、防備体制を強化するのにも適していた。

北方約2.5kmの積翠寺丸山に居館の詰め城としての要害城を、さらにその背後には川窪城を配し、北方の防備を固めた。居館と詰め城の配置は戦国時代の典型とされている。

さらに西前方の湯村山頂に湯村山城、南方やや東寄りの一条小山には一連寺がありそれぞれ防備の一角とすることができた。また、東方の茶道、板垣山には烽火台を設け、情報の伝達体制も整えることができた。このように天然の要害を利用して広い地域を一大要塞化した態勢は戦国時代において他に類例を見ることができないほどであり、戦国期の城館の典型をなしている。

武田氏館跡は、夢見山から延びる尾根に接していることから、この尾根の名を冠して御躑躅ヶ崎館跡とも呼ばれている。

武田氏館跡 I



第1図 武田氏館跡とその周辺の関係遺跡

(2) 歴史的環境

武田信虎によって躑躅ヶ崎の地へ居館が移されたのは永正16（1519）年のことである。それ以前は甲府の東部、川田の地に甲斐武田氏の居館が構えられていた。信昌が川田に居城を構えたなら、約50年間に渡り営まれていたことになるが、信虎だとすれば極めて短期間のうちに躑躅ヶ崎へ居館が移されることになる。

いずれにしても信虎が、それまでの川田から躑躅ヶ崎に居館を移したことは、甲斐武田氏がそれまでの守護大名的性格から戦国大名へと躍進する過程において、防備上、自然の要害である躑躅ヶ崎を意識したことが最大の要因だと思われる。

躑躅ヶ崎造営については、文献資料が多く、克明に知ることができる。永正16年8月に鐵立式を行い以後天正9年に韭崎の新府城へ居を移すまでの60余年間に渡り、甲斐武田氏の本居地として武威を天下に振るうことになる。

このような状況の中で、躑躅ヶ崎移転後の間もない頃は、信虎に対する反抗がなかった誤ではない。しかしこうした反抗も10余年後の天文年間（1532～55）には影をひそめ、甲斐の領国統一に成功し、守護大名から戦国大名へと、完全に脱皮したのである。

さらに、躑躅ヶ崎造営にあわせてその周辺の防備体制の強化も行った。移転の翌17年には、積翠寺丸山に要害城を築き詰め城とした。さらに湯村山や一条小山にも防備施設を配した。また、茶道・板垣山・塚原の鐘椎（掩）堂山にそれぞれ烽火台を設けて、防備と情報の伝達を強化したのである。

さらに信虎は周辺部に家臣團を住まわせ、寺社を強制的に配し商人を集めるなど、戦国時代における町造りにも着手した。甲斐國志によると東西530間、南北902間を対象にした広大な町造りで、館の南約2kmに渡って市街地を形成し、特に穴山・馬場・高坂等の御領類衆や譜代の家臣の屋敷は館の近くに配した。

また、現在でも地名に残る鐵治・鉄屋・大工等、職人を保護し、定住させて町屋をつくり、寺院の開創あるいは移築、市の開設などして、館を中心とする武家屋敷・職人町・寺社を結集した街造りが行われたのである。

躑躅ヶ崎館は、戦国期にふさわしく屋敷自体も周辺の防備も、それ以前に比べてずっと強固であることが大きな特徴とされるが、それにも増して、戦力と富の集中を図った都市造りが完成したということで、歴史的にも画期的な意義があると言つてよかろう。

しかし1572年以後勝頼の代に移り、長慶の合戦（1575年）で大敗した。これが契機となつて甲斐武田氏は衰亡していく。躑躅が新府城へ居館を移したのは1581年のことである。しかし、このことは逆に家臣団の離反を引き起こす結果となる。

甲斐武田氏は1582年に滅ぼし、甲斐は徳川家康が領治することになる。館跡はその領治のもとで再び利用され、中曲輪の天守台や梅翁曲輪は、この時代に造られたものとされている。

第2章 館跡の構造と現状

現在の武田氏館跡の周辺は、南部は宅地化し、北部は田畠になっている。また館跡の内部も武田神社が鎮座したことにより、東と中の曲輪を区切っていた土界が整地されてしまったが、館跡をとりまく堀と土界から往時の姿を察することは比較的容易である。

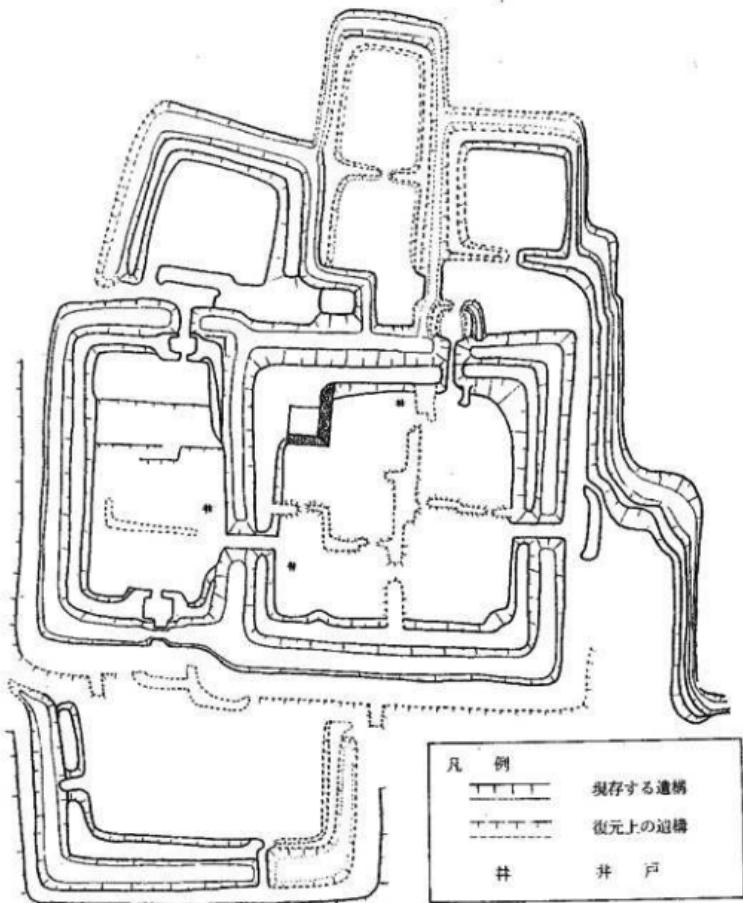
武田氏館跡の構造は『甲斐国志』に詳細に記載されているのでそれを引用する。

凡ソ東西百五拾六間、南北百六間。土堤高一丈許四方ニ塹アリ、門四所ノ区域ヲ別チテ三郭トス。東曲輪ハ東西式拾四間、南北六拾六間東ヲ為端門、当中ニ門坂アリ、左右壘石最モ低シ。櫛脚ケ崎ヘ隔一道ノミ。中曲輪ハ東西三拾二間、南北六拾六間、居館ノ跡ナリ。松樹草荆ノ間ニ石面四五尺以上ナル者數枚アリ。坂山ノ迹ト見エタリ。法性大明神ノ小祠ヲ置ク。西北ノ隅一層ノ台所ハ垣沙門堂ナリト云伝フ。又軍艦ニ所謂御旗屋ト云フモ城内ニ在ルヘキナリ、上ノ平カナル處拾間ニ拾式間許礎石拾壹枚存セリ、西ト北ト石階四五級小門坂ニ所アリ、出プレハ即チ外構ノ堤上ナリ。凡テ石壁ヲ用ヒタル處ハ此台ノ東南ノ二面ト東曲輪ノ中間端門ノ方へ向ヒタル堤ノ片面ト二所ノミ。石ハ野面極メ小ナリ、研磨ヲ加エタルニ非ズ。居館ノ傍ニ石臼ノ欠ケタルヲ難ヘタル處アリ、古瓦等モ絶エテ見エズ、其素朴ナルコト推シテ知リヌベシ。外ニ石礎塔壇數處アレドモ皆伝ヘヲ失ス。南ハ小堀ヲ隔テ台所曲ト云、庖炊所ナルベシ、西ニ門坂アリ西曲輪ヘハ豈遠ヲ隔ツ、架橋涉ルベシ、夫人衆女ノ所居ナリシト云。今ハ竹林茂密セリ。南北ニ門二所アリ、或人ノ説ニ此ヲ人質曲輪トモ云伝フト云、此ニ二郭アリ。一ハ此曲輪ヨリ通ジ一ハ東曲輪ヨリ通ズ、是ヲ御懸居曲輪ト名ヅク。皆涅ヲ隔テタル出丸ナリ。或ハ土俗ノ唱フル御北様、御裏様、御西様ナドト云ヘル婦人方ノ居処ナリシニヤ。外邊ノ南ニ一郭アルハ藏前ノ序所ナリト云、此ニハ深キ溝存シテ水頗ル潤し。以上三郭共ニ島トナリ其形全カラス。

この記載により、館跡は東西284m、南北193mの広大な範囲におよび、その内郭は、周囲に高さ3~6mの土壁と幅18m内外の堀に囲まれていて、東曲輪と中曲輪、堀を隔てた西曲輪を中心に、北に北曲輪を、南に梅翁曲輪を配した複合型式だったことがわかる。しかし信虎が造営した時点では東と中の曲輪のみの単郭だった可能性が強く、武田氏三代とそれ以後、徐々に拡張されていったものであることが、各曲輪の構造の詳細な検討と古絵図等の史料により立証されつつある。

東曲輪は東西約35m、南北127mで東と北に門を配し、東門を大手門とした。現在南に架っている橋は、武田神社鎮座に際して架けられたものである。

大手門は土壘を切断する格好で設けられ、2個の礎石が存在する。幅6.8mを測る大手門に続く橋は幅8.6mの土橋で、脚部は石積みによって補強されている。大手門の前には敵軍



第2図 武田氏館跡概要図

な馬出しが設けられている。

一方北門は、5.4mの幅に土堀を切断する様に通路が付けられ、土橋が造られている。この橋の下方約2mの所には段差が認められるが、他の橋にこの形態は見られない工法で構築されている。ここを抜けると馬出しが設けられているが、北曲輪に通じる橋である。

現在この曲輪には武田神社の宝物殿が建てられている。

中曲輪は東西約60m、南北127mの規模を有し西に門があった。曲輪の北東部と南西部とに井戸を設けている。また、北西隅の太郎様御座所は、東西18m、南北21mの規模で、江戸

時代に、天守台として使われた。また西曲輪とを結ぶ橋は、現在土橋になっているが、甲斐国志の記載から本来は架け橋であったことがわかる。

中曲輪には現在武田神社の本殿および拝殿と、神官の住宅が造られている。

西曲輪は東西67m、南北120mの規模で、中曲輪とは土塁と堀を隔てて接している。南に梅翁曲輪へ通じる門を、北に北曲輪への門をそれぞれ配している。また本来その曲輪中には南北を区画する遺構があったということだが、現在は若干の起伏によりその名残りを留める程度である。

西曲輪の南北の門はその内側にはっきりと樹形を残し、東西約15m、南北18mの広さにおよぶ。北の上橋は1.8mの幅しかないが、樹形と橋と馬出しのセットは東曲輪の門には見られず構築時期の相違の証左となっている。また中曲輪の太郎様御座所と堀を挟んで対峙する位置には、横台らしい高台が設けられ、東西11m、南北20mの規模を有する。ここから堀に沿って南に延びる土塁は、途中で消滅しており、対岸の中曲輪のものとはあまりにも対照的である。別に人質曲輪とも呼ばれた。

現在の西曲輪には重要文化財旧睦沢学校校舎が移築され、中には歴史・民俗等の資料が展示されている。

以上3つの郭をとりまく土塁は上面がいずれも平坦になっている。一方堀は東から南・西に至るまでは水堀であるが、北側はカラ堀になっていた。また特に北堀に面した土塁の基底部には五、六段の石積が顯著に見られ、かつての土塁と堀の姿をよく残している。

北曲輪は前記3つの曲輪に接して付けられているが、4つないし5つの曲輪から構成されていたことがうかがわれる。味曾曲輪、御隠居曲輪などはいずれも北曲輪の名称である。現在は畠となってしまい、当時の全体像を把握することは困難だが、所々に遺構の名残りを見出すことができる。ここは西曲輪より後の時期に増築されたものと思われる。味曾曲輪中にははっきりした馬出がつくられていた。

梅翁曲輪は媒翁とも記載されている。西曲輪と中曲輪の間に、北堀を共有する格好で築営された。この曲輪は戦前の庁所と呼ばれ、天正10(1582)年以後、徳川の家臣平岩親吉の代に築かれたものである。南に門が配され、その付近の堀の幅は12m、土塁幅21mを測る。宅地化に伴い堀の東は完全に埋められ、南と西に一部残った堀と土塁から旧状を知るのみである。内部はすっかり宅地として整備され、過去の面影はもうない。

館跡は現在、武田神社の鎮座も手伝って、観光コースに加えられ、一年を通して観光客が絶えることはない。また、樹木や自然が多く残っていることから市民の憩の場となっているが、今後、館跡をどのように整備し、活用させていくかが大きな課題となってこよう。

第3章 各地点の発掘調査

(1) 調査の経緯

史跡「武田氏館跡」地域内における、住宅の新築、増改築に伴う発掘調査は、昭和54年度まで山梨県教育委員会において行われてきた。昭和55年度に至り、県教委より甲府市教育委員会へと、現状変更に伴う発掘調査事業は引き継がれた。

甲府市教育委員会では、昭和55年度2件、56年度3件、57年度4件の合計9件の住宅の新築及び増改築の現状変更申請に対し、文化庁並びに山梨県教育委員会文化課の指導を受け、緊急発掘調査を実施した。

(2) 発掘調査地点

昭和55年～57年度に渡る発掘調査地点は、合計で9地点を数える。そのほとんどが指定地域の南側に集中している。(第3図)昭和55年度より実施してきた現状変更に伴う発掘調査を、調査した順序に従ってA～I地点と呼ぶことにする。

A地点、館跡の東側の大手門を出たすぐ南側にある。住宅の増築工事に伴う発掘調査であったが、遺構等の検出はなかった。

B地点、館跡の南西部に付随する梅翁曲輪のはば中央部に位置する地点である。住宅の改築工事であり、調査により2種類の暗渠水路が発見された。

C地点、梅翁曲輪の南側の土壘上にあたる。発掘調査により、土壘と、土壘構築前の生活面及び、埋葬人骨が発見された。

D地点、古絵図による穴山氏の居館跡にあたる住宅の改築工事に伴うものである。集石がみられるが、人工的なものであるかどうか疑問である。

E地点、D地点山田宅の北東部にあたり、古絵図による高板氏屋敷跡に位置する。車庫の改築による事前調査で、D地点同様の集石がみられた。

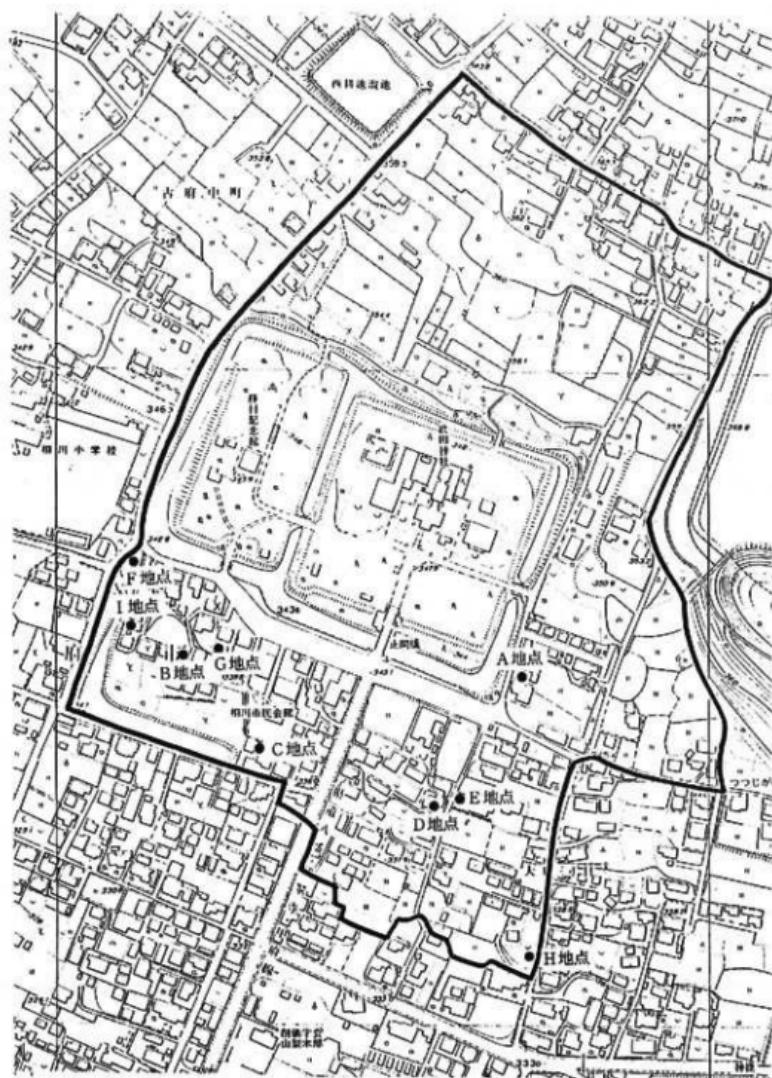
F地点、学生用アパートの新築に伴うもので、梅翁曲輪の西北部の出入口部分にあたる。暗渠水路、石段状遺構、礎石状遺構に伴出し、土器片、陶器片、古銭、漆器等の多種類にわたる遺物が発見された。

G地点、住宅の改築に伴うもので、B地点の東北部にあたる。水路と溝が検出され、溝中から大量の土器、陶器類が発見された。

H地点、史跡指定地域の東南の端に位置する。住宅の新築に伴うもので、遺構の検出はみられなかったものの、当時の土器、陶器、古銭のほか縄文時代の遺物も検出された。

I地点、梅翁曲輪東側の土壘上にあたる。住宅の改築に伴うもので、土壘の部分的な立ちわりによって、土壘構築前の礎石と陶磁器類を検出できた。

武田氏館跡 I



第3図 武田氏館跡史跡指定地域及び発掘地点位置図

(3) A 地点

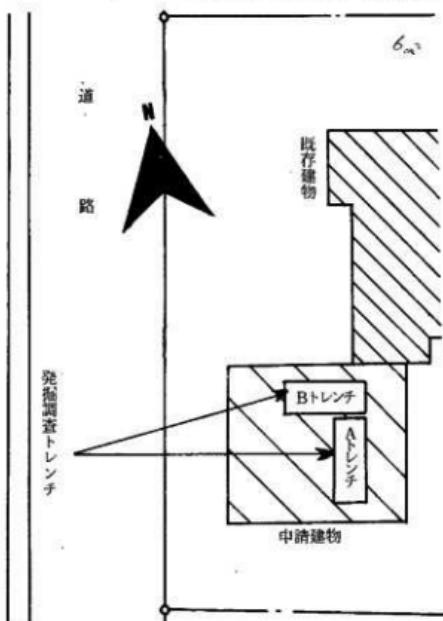
はじめに

本調査は、甲府市古府中町3624番地の幡野宅増築工事に伴う現状変更の事前緊急発掘調査である。本地点は、武田氏館跡の大手門入口にある馬出しの南約10mの位置にあたる。道路を隔てて西には武田氏館跡東曲輪の東側に南北に延びる堀（長堀）があり、東方には、躑躅ヶ崎上堀、下堀が存在する。この両者に挟まれた地域中にあたり、武田神社蔵の貞享年間の古絵図（図版32）で躑躅ヶ崎霞城と書かれている地域である。現状では、古絵図等にみられる馬出しのうち、南側半分は削平されて人家となっている。そのすぐ南に接する地点であり、これまで幡野家の庭の一部となっていた場所である。

調査日誌

昭和55年度 古府中町3626 幡野勝宅

S56. 2. 23 土地所有者と調査区域の再確認を行う。発掘機材等の搬入及び、調査補助員の確保のための連絡をとる。

6m²

2. 24

調査開始前に、ボーリング棒によつて地中の探査を行う。土地所有者の話から、旧庭の庭石や植木などを重機で掘削して埋めた攪乱部分があるとの口状がわかつていたため、この範囲を探った。調査トレンチとして、1m×3mの東西方向のBトレンチと南北方向のAトレンチを「フ」字形に設定。掘り始めたところ、Bトレンチでは攪乱が激しかつたが、Aトレンチは良好な土層状態であった。

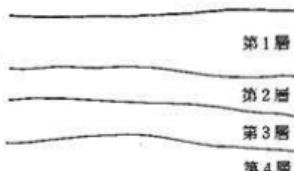
2. 25

Aトレンチの掘り下げの続きをを行う。特別な遺構・遺物の検出はできなかつたので、全体図・セクション図の作成を行う。埋め戻しを行い調査終了。

第4図 A地点トレンチ配置図 S=1/200

層序

第1層	灰褐色土層	瓦礫等を含む表土層。
第2層	茶褐色土層	旧水田の耕作土層。粘性 があり赤味をおびる。
第3層	赤褐色土層	旧水田の床土層。鉄分の 酸化のため、赤味が強く 粘性がある。
第4層	暗褐色粘土層	径2~10cmの小石を含む 粘土層である。



第5図 A地点A トレンチ北壁土層図

発掘調査結果

本地点は、前述のごとく武田氏館跡の大手門に近く、その位置からして道路やそれに付随する水路などの石列、あるいは建物址としての礎石の存在が想定された。しかし、土地所有者の話で、庭の植木類を重機によって掘り上げてしまったという経過があることから、現状変更の申請地内をくまなくボーリングステッキにより地中探査し、地層の状態を調べてみた。比較的良好な部分を多く含めて、南北方向のAトレンチ、これに北で接し西に延びる形のBトレンチを設定して調査に入った。

Aトレンチでは、庭石や植木の廃棄場所にあたってしまい、表土直下にみられる旧水田の床土にあたる赤褐色土層が北端部にしかみられなかった。最近の搅乱であるらしく、芝生や植木のまだ腐りきっていないものが含まれているため、これが確認された地表下30cmの所で片側の調査は打ち切った。北壁ぎわの土壙の良好な部分は、地表下約80cmまで掘り下げたが、何も遺構、遺物にはあたらなかった。

Aトレンチでは、全面に第2層の茶褐色土層の旧水田の床土がみられ、人家になって以後の搅乱はみられず、地下の遺構等の遺存に期待が持たれた。地表下約80cmの所まで掘り下げ、第2層の下に2枚の土層が確認された。しかし、調査区域内には人為的な痕跡は、まったく残されていなかった。

今回の発掘調査では、武田時代の遺構、遺物等は皆無であった。しかし、館跡内の位置的なものから何らかの施設が想定されるところである。調査面積が6.6m²と狭小であった点から、調査トレンチが遺構等の空間部分に位置してしまった可能性も考えられるが、総合的な判断は今後の周辺部の具体的な調査に待つところである。

(4) B 地 点

はじめに

本調査は、甲府市屋形三丁目2585の2番地に所在する広瀬宅の住宅改築工事に先立つ緊急発掘調査である。本地点は、梅翁曲輪のほぼ中央部にあたり、曲輪内の中枢部分の建物址の礎石や、これに付随する水路の存在のほか、古文献の一部にみられる「藏前の廈所」としてと土蔵の基礎や上台などの検出が想定された。

過去に県教育委員会の発掘調査が、この地点の隣接地において実施されており、東側地点からは水路の石列が検出されている。西側では、武田時代の遺構等の発見はなかったようである。

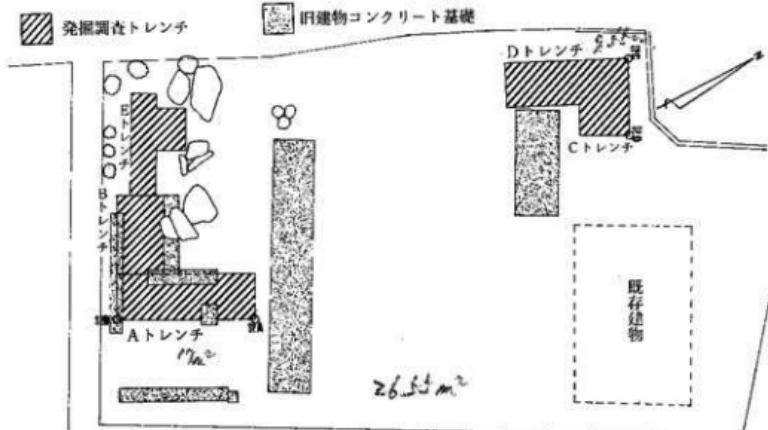
本地点は、北から南に向かって緩やかに傾斜しており、これを平らにするため北側部分がやや削平され、南側には客土による盛土がされている。

建物の取り壊した後の現状は、最近のゴミ穴等の搅乱が数箇所みられ、調査区の中央部は大きなゴミ穴の存在がうかがわれた。これらを避けた形で、発掘調査トレンチを設定し調査に取りかかった。

調査経過

昭和55年度 星形三丁目2558-2 広瀬政宅

S56. 2. 26 発掘調査について現地での打ち合わせ。終了後、ボーリング柱で調査地内の探査を行う。探査結果と整地の状況、旧建物との関係から、A・Bトレンチを設定する。



第6図 B地点全体図 S=1/200

2. 27 A・Bトレンチを掘り始める。整地のための客土部分を除去する。再度のボーリング棒での探査で、旧地表下15cmの地点に平坦な面をもつ細長い石のようなものが確認されたが、掘り出してみると旧建物のコンクリートの基礎であった。この基礎の南北の2本の真中のAトレンチ中央部に、小石を敷きつめたような幅40cm位の遺構が確認された。
2. 28 この石敷遺構を追っていくと、Aトレンチ南端部で、旧建物の基礎のコンクリートの下にもぐっていることが確認された。Bトレンチの方も、この遺構の面まで掘り下げる。中央部にAトレンチと同様に南北に走る石列を発見。表面の平坦な石が並ぶものである。
3. 1 昨日に続き、A・Bトレンチの精査。Bトレンチの幅を50cm広げ、配石の状況を知るために掘り進む。Aトレンチ東壁、Bトレンチ南壁のセクション図作成。全体図とAトレンチの配石遺構の実測に入る。
3. 2 昨夜からの雪が、20数cm積もったため、ミーティングと図面整理。
3. 3 Bトレンチが雪解け水で地盤が緩み壁面に亀裂が生じているため、先にこのBトレンチの配石の平面実測をする。写真撮影後、上石をとりはずすと、2列の石が並ぶ水路が顔を出す。この配石が暗渠と確認される。Aトレンチは、幅50cmの範囲で石をはずし、記録をとりながらその性格の解明に努めた。小石の下から平板状の蓋石があらわれ、この下が暗渠となっていた。
3. 4 昨夜の雨で、Aトレンチの暗渠の石を除去した部分が壁の崩壊した土で埋まったため、この部分の土を除去する。土を取り除いたあとこの部分の断面図・透視図を作成する。
3. 5 調査区内にみられた暗渠は地形上からみて北から南に流れているため、下流の松木堀への出口を調査し発見する。Aトレンチを暗渠に沿って、北に延長した状況を見る。北側は、現在使用されている排水管がすぐ北を通り、更に北には旧家屋の瓦礫のゴミ穴が存在し破壊されていた。調査区西側に、ボーリング探査によって石の集中がみられたので新たにCトレンチを設定し掘り始める。同時にAトレンチの埋め戻しにかかる。
3. 6 Cトレンチの掘り下げを進める。地表下40cmの所で配石が存在し、南北にのびるところからDトレンチをこの南の延長上に設定し掘り始める。Cグリット北壁セクション図を作成する。
3. 7 C・Dトレンチの配石の実測。Dトレンチの南側に、Eトレンチを設定し、配石の続きをみる。人工的な平板状の石の存在が知られたが層序に疑問が残る。
3. 8 Eトレンチの配石の広がりを追ったが、現代のものと判明。C・D・Eト

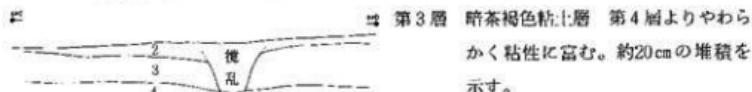
レンチを全体図に記入し、埋め戻しを行なって旧状に復した。器材を洗浄し、あとかたづけを行い作業終了とする。

層序

本調査地点も、北から南に傾斜がみられ、諸々の事情から調査地点がA～Eトレントと分断されているため、削平の少ない南側のA・Bトレントの層序を基準層序とする。

第1層 灰色砂層、整地のための客土であり、北側のC・DトレントではみられずA・Bトレントにのみみられる。

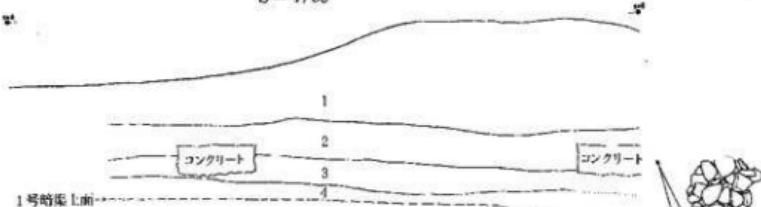
第2層 暗灰褐色土層 旧耕作土の表土層である。調査区の北半では、瓦礫やジャリが混じり厚く搅乱によって入りこんでいる。



第7図 B地点Cトレント北壁セクション図

S-1/60

第3層 暗茶褐色粘土層 第4層よりやわらかく粘性に富む。約20cmの堆積を示す。



第8図 B地点Aトレント東壁セクション図 S=1/40

第4層 暗茶褐色粘土層 非常にしまりがあり堅い土層である。本層上面下10～30cmの間に遺構が存在し、極めて小破片ながら上部質器片、陶器片や炭化粒子が含まれている。

検出遺構

本地点からは、蓋石の上部に拳大の石を積んだものと平板状の蓋石をもつ2種類の暗渠及び、人為的と思われる配石址が検出された。

第1号暗渠

Aトレントをほぼ縦断する形で存在する。確認された部分は、南北3.3mの長さであるが、おそらく調査区外にも延びていると思われる。

上面の幅は約40cmで、水の流れる蓋石下の水路部分の幅は6～12cmを測る。



第11図



第10図



第9図 B地点
Aトレント
1号暗渠

暗渠の構造は、断面図や見透し図でよくわかるように、上面から約20cmの厚さに径5~10cmの小石が密に集積されている。石の大きさは25cmを越えるものや1~2cmの小石もある。上面以外の石の間には、土の進入が及んでおらず、隙間の空間が今だに保たれている。この下面にあたる蓋石は、長さ20~30cmの平板状の石で厚さは5~10cmを測る。なおこの蓋石の外側に、裏ごめ石もみられる。水路を形成する両側の石は、10~20cmの長さで側面の一方が直線をなす石が用いられている。この厚さは約7cmで統一されている。これらの石によって形成された水路として機能できる空間は、幅10cm、深さ7cmである。

水路の傾斜は、北端部から270cmの地点まで同一で6cmの比高差をもつ。この地点から角度が変わり、わずか50cmで10cm下がり急傾斜になる。

底面には、泥が堆積しており最近まで機能していたようすがうかがうことができる。この泥を除去したところ、調査期間中に降った雨水や雪解け水と思われる水が、北より南に向かってわずかに流れる形跡が確認された。

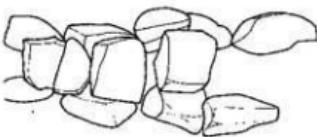
第2号暗渠

Bトレンチのほぼ中央部、現地表下105cmの位置に存在する。側石には、長さ20~30cm、幅10cm前後の柱状の石が使用されている。わずか1mの長さで確認されたにすぎないが、この水路の幅員は北側で15cm南側で7cmと差が大きい。蓋石も、北側2個は約20cm四方の石が用いられているが、最南端の石は10cm四方余と小さいものが使われている。蓋石はAトレンチでは側石より幅広のものが使われていたが、本

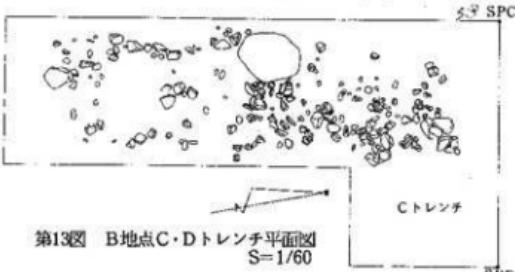
地点のものは5~7cm側石が左右にはみ出た形となる小さい石が使われている。この蓋石の下には上が完壁に進入しており、土層の状態もまわりの土層と同様であった。

第1号配石

Cトレンチの西半からDトレンチの中央部にかけて存在する。幅約1mでほぼ同一平面上に置かれている。石の大きさは径5~20cmのものがほとんどであるが、径30cm、60cmの礎石のような石も混ざる。ほぼ南北に細長く延びるようであるが、Dトレンチの南半部では、まとまりがみられない。第4層上面に存在するが、第4層自体にはほとんど石のみられない粘質土層であるため、本遺構は何らかの配石造構の破壊後の状態を示すものと思われる。



第12図 B地点Bトレンチ2号暗渠平面図
S=1/20



第13図 B地点C・Dトレンチ平面図
S=1/60

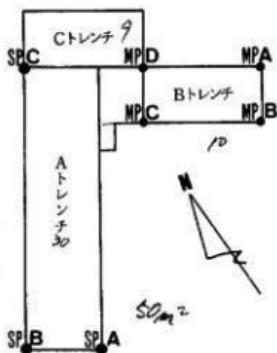
(5) C 地 点

はじめに

本発掘調査地は、武田氏館跡の南西に存在する梅翁曲輪にある。より細かに旧絵図面や現状の地形などから推定すると、曲輪の堀の内側に構築された土壘上にあたる。現状では、堀、土壘ともに埋め立てられ平坦に整地されている場所である。客土に、瓦礫や大きな石の混入が想定されるところから、重機によりこれを除去し、土壘を一部たちわって構築状況や梅翁曲輪築造以前の何らかの施設の存在を想定して作業に取りかかった。

発掘調査日誌

昭和56年度 畜形三丁目2529-1 興石俊郎宅



第14図 C地点トレンチ配置図

- S56. 4. 10 調査区西北を基点として、南北に長さ10m×3mのAトレンチ1.5mのベルト部分を残し、東西に長さ8.5m×幅3mのBトレンチを設定する。小雨ではあるが、重機の契約上表土剥ぎを始めた。
4. 11 発掘器材の搬入後、壁面を垂直に整える作業をし、Bグリットについては、断面の精査検討をし、明らかに人為的な疊の集積層を確認する。
4. 12 Bトレンチにおいて、土壘の土止め用の石積が存在することが確認された。これを平面的におさえるため、ベルト部分を掘り下げ始める。
4. 13 ベルト部分の掘り下げと同時に、石積みの延長上のAトレンチ北端部分を調査し、石積みの上面の石列を検出する。ベルト部分に石の集中がみられるものの、小さめの石である。
4. 14 ベルト部分の右の集中が人為的なものであるかどうか探るために、ベルト部分北部にCトレンチを設定し掘り下げ始めた。Bグリット北壁と東・西壁の土層断面実測作業も進める。
4. 15 土壘の北側は、野面積みの石垣であることが判明したので、ベルト部分の石垣の面を検出する作業にかかる。この石垣の北側の埋め立ては、比較的最近行われたことが、土層中のガラスやプラスチック製品の混在で明らかとなった。
4. 16 石垣の実測作業を実施する。Aトレンチ南側の深掘り部分の調査に入る。壁を垂直にし、断面を観察する。
4. 17 Aトレンチ西壁と南壁のセクション図を作成し、土層を観察する。

4. 18 Aトレンチ南壁の深掘り部分から人骨出土。右側を下にした側臥屈葬形態をとる。記録、写真撮影後警察に連絡する。取り上げのち、器材のあとかたづけ等をして、調査終了。

層序

本調査地点は、ほぼ土壘の真上にあたり、埋め立てられた地点もあることから、Aトレンチ南側深掘り部分の土層を基準とする。

第1層 黒褐色土層

第2層 褐色土層 拳～人頭大の石が多量に混ざる粘性があり堅い土層。宅地造成時の盛土である。

第3、4層 暗褐色土層

第5層 黒褐色土層 } 壁構築時の盛土である。粘性があり非常にかたくつき堅められている。わずかに土師質土器や陶器片が含まれている。

第6、7層 暗褐色土層

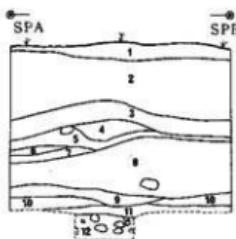
第8層 暗褐色土層

第9層 黑褐色土層

第10層 黒色泥質土層 水性の泥の堆積層である。たかし小僧と呼ばれる管状の鉄分の集中物も多く混ざるほか、土師質土器片・陶器片もみられる。

第11層 茶褐色土層 人骨が埋葬されていた土層である。

第12層 晴茶褐色土層



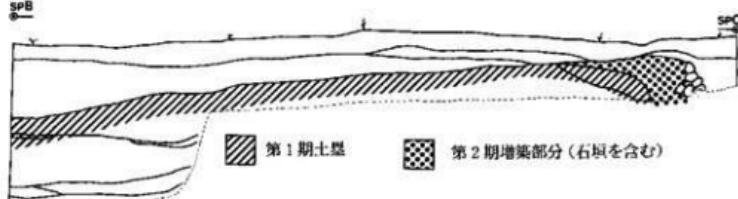
第15図 Aトレンチ南壁セクション図

検出遺構

本調査区からは、現状で推測の域を出なかった土壘の存在が明らかとなり、この北側に築かれた石垣とともに、土壘下から埋葬人骨が検出された。

(1) 土 壕

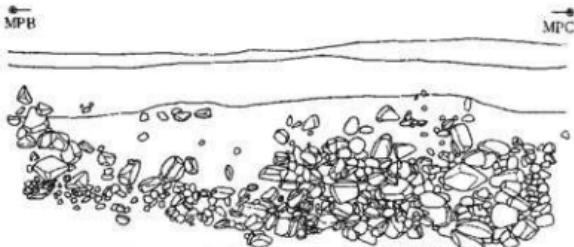
本地点で確認された土壘の規模は、基底部からの高さ1.5m、基底部幅10m以上、土壘上部幅約7mを測る。しかし、南側の端から堀に続く部分は、隣地にかかることや、傾斜が緩



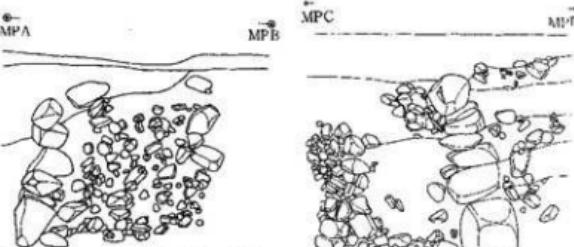
第16図 C地点Aトレンチ西壁セクション図 S=1/40

く土壌上部平坦面と傾斜面との境界点が不明確であるため、この数値はおよその数値である。

土壌を一部たちわってみたAトレントチ及びBトレントチの状況から、その構築状態をみてみたい。Aトレントチでみられる土壌南側では、その表面は緩やかに傾斜し堀につづくものと思われる。土壌

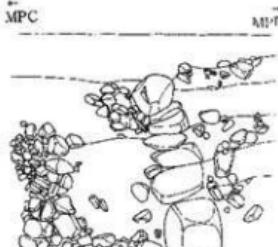


第17図 C地点Bトレントチ南壁見通し図



第18図 Bトレントチ東壁見通し図

S = 1/40



第19図 Bトレントチ西壁見通し図

S = 1/40

は、基底部にいたる第10層が過去水で浸されてきた堀または池の底に堆積する黒褐色の泥質の土層である。その上部に、約1.5mの厚さで粘土質の土が8層にわたって盛られ、更につき固められている。なお、この泥質の上層の下部は、酸化鉄の固まった面が形成されていた。この盛土に使われた土層は、一般的な堀と土壌の効率的な構築方法にのっとっておそらく堀を掘削した時の土であったと思われる。土壌構築以前に残された遺物が、この盛り上げられた土層の断面中から検出されたことからも理解されるのである。第2層から第8層がこれにあたるが、つき固められて非常に堅い。

Bトレントチ及びAトレントチの北端では、土壌の北側斜面が、野面積みの石垣になっている。石の人さは、70~30cm位の石が使われ、下方ほど大きくなっている。6~7段に積まれていることが看取される。

土壌の内側には、拳大から人頭大の石が多量にみられる。一部は石垣の裏込め石としての機能を考えられるが、Bトレントチ西壁にみられるように、石の集中する部分と石垣の間には、石の含まれない部分があり裏込め石ではない。Aトレントチの西壁の土層の観察から、土壌北側の石垣構築以前の旧表面にあたるものと思われる。この石の集中部分は、石の間の土層は粗でありやわらかく空間さえある。土壌の開口部、すなわち占総岡による梅鉢曲輪の南側の出入口にあたる部分が石によって閉塞されたものとも考えられるが疑問の余地が残る。なお、遺物として一点この石の間より硯の破片が出土している。

(2) 埋葬人骨

Aトレンチ南側の深掘り部分の第11層中に見つかったものである。頭位を北に向かって、右側面を下にし、足を折りまげた側臥屈葬の形態をとるものである。周囲や人骨下を精査してみたが、墓壙の輪郭や底面は確認されなかった。

人骨は、頭蓋骨が完全に残り上顎の歯も完存している。下顎骨は、非常にもろくなってしまりも悪く、齒も臼歯が確認されたのみである。肋骨、肩甲骨、脊椎も調査時点での痕跡は認められたものの、土と化しており取り上げることはできなかった。

副葬品や装身具類も検出されなかった。土壌構築時の人柱とも考えられるが、上を覆っていた鉄分堆積層の存在からそれは否定されよう。この鉄分堆積層があったから、外気と遮断され、適度の湿気が保たれた状態で密閉されたために、比較的良好な保存状態が保てたものである。この人骨が埋葬された時期は、保存状態の良好さから第10層の堆積する直前、すなわち梅翁曲輪構築以前の武田時代のものであると推定される。

(3) 山土遺物(第20図、図版9)

土師質土器・陶器・硯・鉄製品などがある。硯がBトレンチからの出土である他は、すべてAトレンチの南端部の深掘り部分からの出土である。総数50点余りであり、そのほとんどが武田時代の16世紀代のものと思われるが、縄文時代の黒曜石片と、使用痕をもつ灰色チャートの剥片が出土している。

土師質土器(1~4)

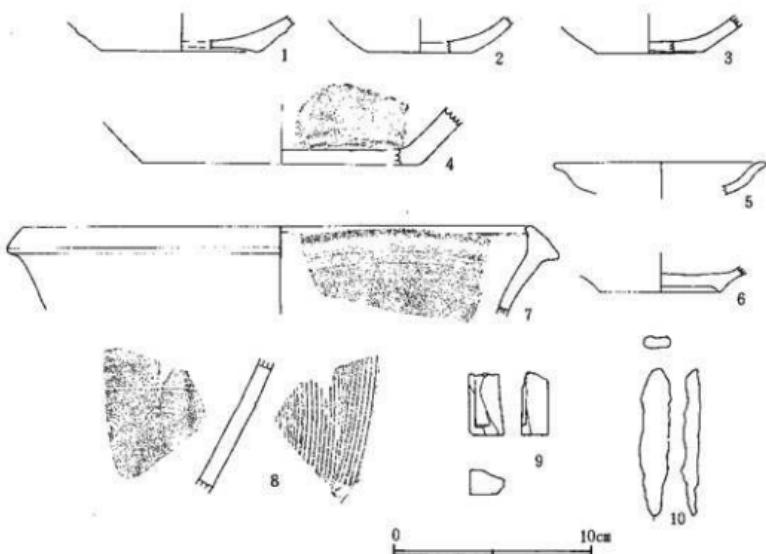
総数35片を数える。そのほとんどが圓形土器の破片であり、他に擂鉢や鉢の底部も存在する。皿は、口縁部が単純に丸頭状になるもので、一部のものにはススの付着が認められ、透明皿としての用途がうかがえる。底部はすべて静止糸切り痕が残っている。3は10層からの出土であり、1同様上げ底風になっている。胎土には、赤色粒子や白色粒子のはか雲母の混入が顕著なものが多く、色調は灰褐色から明茶褐色を呈す。2片白色薄手のいわゆる白カワラケの小破片が存在する。

4は擂鉢の底部付近の破片である。スリ目は、4条まで看取される。底径14.2cmを測る。第5層からの出土である。

陶磁器(5~8)

総数7点出土しており、擂鉢と美濃窯瀬戸灰釉皿、中国青磁の3種類が存在する。

5・6は灰釉小皿の破片である。5は灰褐色を呈する釉薬をもつ口縁部で、口径10.8cmを測る。表裏ともに黒褐色の嵌入が入る。器表面にはタール状の炭化物の付着がみられる。破片の割れ口部分にも黒変が認められるので、廃棄後の二次的な加熱に伴う炭化物であると思われる。6は、径6cmを測る底部破片である。薄緑色の釉薬のつくもので、高台部の粘土の部分は2mmほどで細いが、特にこの外側に釉薬が厚くかけられており2倍以上の厚さとなっている。内側底部にも釉だまりとなる程に厚く釉薬が付けられている。釉薬中には気泡が多く含まれており、表面もこの気泡のために底面側に多くの小孔がみられる。他に數点瀬戸灰



第20図 C地点出土遺物

動皿の小破片が存在するが、すべて灰緑色の釉薬である。

7・8は、描鉢の破片である。7は、直徑15cmを測る口縁部破片で、2箇所にスリ目の条線がみられる。条線の数は、10本まで確認できる。口縁部の内側と外側には、粘土の付加によって形を整えてあり、口縁端を折り返したものではない。粘土上は白色の軟質なものであり、白色の砂粒が含まれている。割れ口部分にはタール状の付着物がみられる。8は底部に近い胴部破片である。内側には、密にスリ目の条線が施されており、12木が一単位となっている。粘土は灰褐色をしており、表裏両面ともに青黒褐色を呈す。

他に、中国渡來の青磁があり、灰青色を呈す小破片である。元時代に、龍泉窯で焼かれたものである。

硯（9）

粘板岩製の硯の一部である。厚さ1.2cmを測り、側面、底面、表面とともに平らに切断されている。Bトレンチの南壁の疊中よりの出土である。灰褐色を呈し、現存長は3.1cmを測る。

鉄製品（10）

長さ7.5cm、最大幅1.4cmを測る先端のやや尖るものである。周囲には銷が付着しており、本来の形はとらえにくい。削れた断面の観察から、刃部をもつものではなく先端の尖った部分が機能する製品であったと思われる。第10層からの出土である。

(6) D 地 点

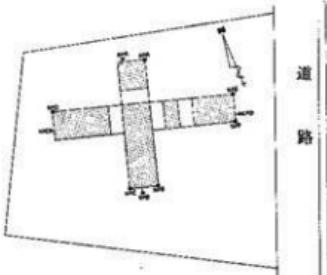
はじめに

本地点は、甲府市大手三丁目3711-2番地、山田宅の改築工事に伴って、緊急発掘調査が実施されたものである。古絵図によると、穴山伊豆守屋敷跡の東南にあたり、出入口の建造物の礎石や境界を示す遺構の存在を予期して調査に入った。

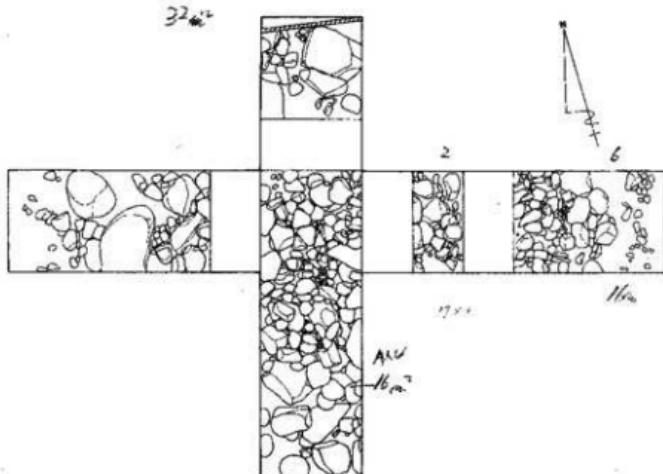
発 捜 調 査 日 誌

昭和56年度 大手三丁目3711-2 山田清宅

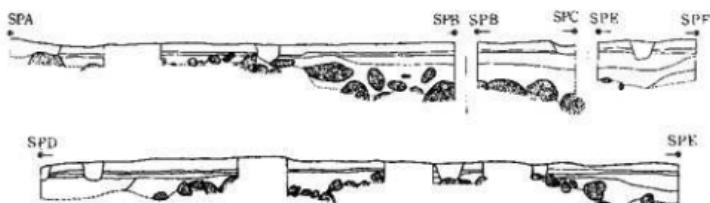
- S56. 5. 14 調査調査区域のはば中央部に90cm×65cmの試掘坑を設定し掘る。-25~50cmの位置に石の集積が見られた。石までの土層が比較的浅いため重機の投入は行わず、手振り作業で進めることに決定。
5. 17 調査区域内に南北に細長く9m×2mのAトレンチ、この西側にBトレンチ、東側にCトレンチを設定する。B・Cトレンチは合わせると東西13m×2mの広さのものである。
5. 18 AとB・Cトレンチの交わる部分と、Cトレンチにも手をつけ、A1・2、B1・3、C1・2区の調査が進む。層位は、ほぼ一定しており、地表F20cm付近で旧水田の床上の赤褐色土層にあたる。この下の層中に石組がボーリング棒にて確認された。
5. 19 A 2区から大きな平板状の石出土。表土に近く他の石よりレベルが高い。クサビにより2分されている。旧水田の床上面まで掘り下げたが、A 2、B 1区では後世の擾乱のためこの層位は見い出されなかった。
5. 20 A 1・2・3区を深く掘り下げる。試掘坑や、ボーリング棒探査によって確認されている石組の検出作業を進める。A 3地区からは、他より深い地点に石がみられた。
5. 21 A 2区も掘り下げAトレンチ両半の石の検出をする。
5. 22 地権者と調査後の処理について話し合いを行う。
5. 23 石の面の検出の続きを再開する。
5. 25 石の面の清掃、実測、写真撮影をする。石の面の洗いを行う。
5. 26 清掃後、写真撮影を行い平面実測作業の続きをする。セクション



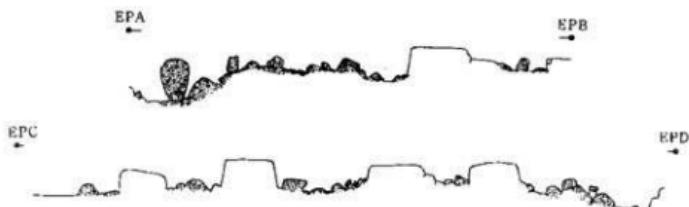
第21図 D地点トレンチ配置図



第22図 D地点調査区全体図 S-1/120



第23図 D地点上層図 S-1/120



第24図 D地点エレベーション図

ン面を精査し、断面図を作成する。

5. 27 記録のものを点検し、実測図の追加、補足を行う。
5. 28 調査トレンチ内に切り込み砕石を投入し、埋め戻しを行って調査を完了する。

層序

- 第1層 暗褐色土層 旧耕作土にあたる表土層。旧建物解体時の瓦礫が混ざる。
- 第2層 赤褐色土層 旧水田の床土にあたる。酸化鉄の堆積で堅くなつており、ほぼ同一レベルで5cmの厚さをもつ。
- 第3層 暗褐色粘土層 非常にしまりがあり堅い。径2~5cmの小石が多く含まれている。
B1・C1・A3区の石組みの断差部分から外部にみられる土層である。
- 第4層 褐色粘土層、非常にしまり、粘性があり堅い。本層中に石組が存在する。
- 第5層 暗褐色礫混土層 径2~15cmの石が多量に混ざりしまりのある土層。C1の東端部のみで確認された。

発掘調査結果

今回の調査では、本調査に入る前に、調査区中央部に試掘坑を設け地下のようすを探った。地表下25~50cmの地点で石の集積がみられたため、この範囲と性格を捉るために、南北9m×東西13mのトレンチを設定して調査に入った。試掘坑の位置は、両方のトレンチの交わる部分のA1トレンチの南側にあたる。調査区内は、旧建物の基礎のコンクリートや水道管、排水管、及び便溝によって部分的に搅乱はされているものの、比較的浅い位置で止まっていた。

A1トレンチでは、ほぼ全面にわたって石がみられた。これらの石は、大きさ20~50cmのものが多く、安山岩や花崗岩である。A1トレンチの北半は、ほぼ平坦に地表下40cmのあたりで上面をそろえているが、南端では地表下90cm位まで下がり、約50cmの段差をもつ。石も南端部では、1m以上の大さなものが多いた。

A2トレンチでは、水道管が通っているものの、地表下約40cmのあたりに石が集中する。ほぼ中央部に1.5mもの大石があり、クサビによって二分されている。旧建物の基礎工事の時の所産と思われる。

Bトレンチでは、西端部で石はみられないが、東半には石が集中する。径2mを超えるような花崗岩の大石が存在する。

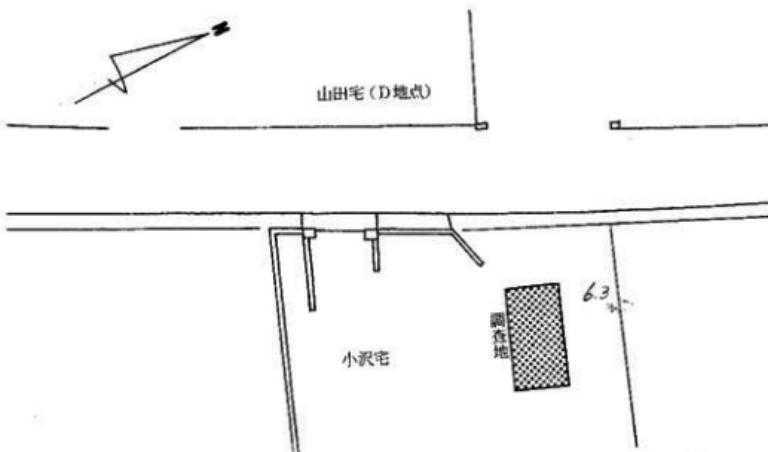
Cトレンチでは、東端部で石を欠き、西半では地表下約50cm付近に石の上面がくる。径40~50cmの石が多い。石のある部分の東端は、約40cmの段差となっている。

本調査地点からは、その中央部に径約11mの石組みが検出された。この石組みは、径20cm~1mの石が集積しているもので、花崗岩、安山岩など周間に自然に存在する石である。大部分の石は、角がとれてやや丸味のある石である。近所の人の話では、東側に通る道路工事中にもこのような石が存在していたという。遺物がまったくみられなかつたこと、中世庭園様式にこの種のものがないことや、石が人工的に配置された形跡がうかがえないことなどから、扇状地の土石流による堆積物と考えたい。特殊な庭園の一部であるという可能性もまったく否定することはできないが、自然營力による堆積物と考えるほうが妥当であると思われる。

(7) E 地 点

はじめに

本地点は、甲府市大手三丁目3742番地、小沢宅の車庫改築工事に伴なって実施された緊急発掘調査である。古絵図によると、東曲輪の大手門のある入口から南に延びる道路に面し、高板篠正屋敷跡の南西端にあたる地点である。前回の発掘調査地であるD地点からみて、本調査地点は道路を隔てて北東に位置する。

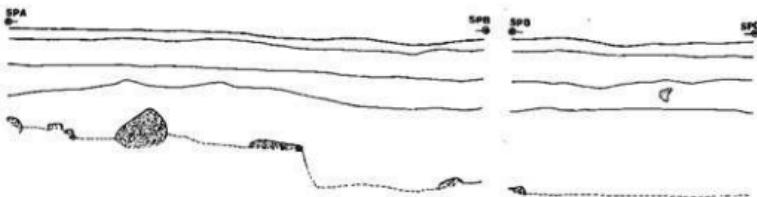


第25図 E地点調査区位置図 S=1/200

発掘調査経過

昭和56年度 大手三丁目3742 小沢香織宅車庫

- S57. 3. 21 現地打ち合せと、発掘器材搬入等の準備を行う。
- 3. 22 東西3.5m南北1.8mの調査区の設定。掘り始める。
- 3. 23 更に掘り進めた結果、東側に石の集積があり、ボーリング棒の探索により、西側にも広がっていることが判明する。
- 3. 24 石の面を検出する作業を行う。
- 3. 25 西に傾斜する石組をほぼ検出し、清掃作業をする。全体図、平面図、セクション図の実測と、写真撮影を行った。
- 3. 26 図面の補足と写真の撮影後、切り込み碎石により埋め戻しを行い、調査を完了する。



第26図 E地点土層図

層序

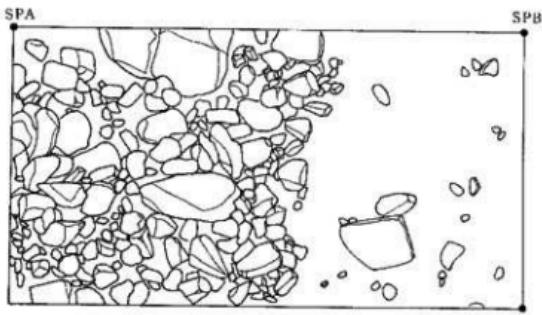
- 第1層 黒褐色粘質土層 旧車庫の建築時に削平されていて7cm位の堆積をみる旧水田耕作土である。この下部のⅡ層との境界部分には鉄分の堆積した黄褐色の面が存在する。
- 第2層 茶褐色粘質土層 径1mm位の炭化物や砂が混ざるが、小石は少なく、粘質の強い土層である。
- 第3層 暗褐色粘質土層 炭化物や小石が多く混ざる粘質土層。
- 第4層 暗褐色粘質土層 混入物でⅢ層と異なり、密度が高く非常に堅く粘性が強い土層である。

調査結果

本調査は、駐車場の改築工事ということから調査面積が非常に限られたものであった。敷地内の廃土を置くための空間等の関係から、南北1.85mの調査区しか得られなかつた。

また、取り壊す前の車庫を構築する際に、表土が削られて、半らにならされており、他の所よりも約20~30cm低くなっていた。

本地点南西の隣接地D地点の発掘調査で、集石がみられていたため、本地点もこれが想定された。想定どおり調査区の東半から、石の集積がみられた。第4層中に存在し、東端から中央部にかけて緩く傾斜する。石は5~70cmと大小雑然と入り乱れており、安山岩・花崗岩と混在している。調査区西壁に、かまどの構築材の一部と思われる焼成粘土塊がみられ、周囲に炭化物を伴っているのが唯一の人工遺物である。この包含している土層は第3層中であり、集石のみられる第4層下部とは約50cmの隔たりがある。これは、第3層が武田時代の生活面であって、第4層下部の集石中に遺物が皆無であることを考え合わせ、自然営力による扇状地の石の堆積したものと理解されよう。



第27図 E地点調査区平面図

(8) F 地点

はじめに

本調査は、甲府市星形三丁目2577番地山本氏申請のアパート新築工事に伴う緊急発掘調査である。古絵図による梅翁曲輪の西北側の出入口部分に位置し、隣接する北から東側にかけては、約1.5mの比高差をもち一段低くなっている。南側は、通称松木堀と呼ばれる梅翁曲輪をとりまく堀の北端部となっており、この松木堀に西曲輪の堀から流れる小河川が西側を流れている。

本調査地点は、当初松木堀の埋め立て部分であることが想定されたため、重機による掘削を試みた。地表下約60cm付近にて良好な生活面とみられる炭はじりの焼土面がみられた。諸々の理由によりこれまでを第1次調査として一括中断し、調査体制を整えた段階で残りの部分の第2次調査を実施した。

発掘調査経過

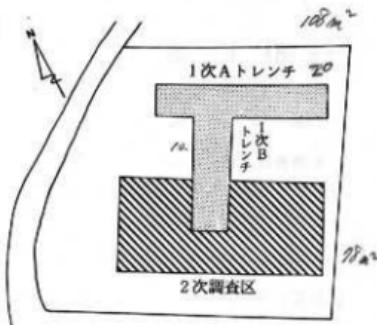
第1次

- S57. 5. 10 発掘器材の搬入。重機の予約。
5. 11 Aトレンチ設定。(22m×10m) 重機による掘削開始。客土による埋め立て層除去。--150cm位まで掘り下げる。Aトレンチ東端にて、最近まで使われていたという井戸が検出される。水位が高いため、この部分を避けて掘り下げる。
5. 12 Aトレンチ北壁土層面の精査をする。埋め立て層と褐色土層の間の炭化物層の中に土師質土器片が数点みられた。
5. 13 雨のため現場で打ち合わせのみ。
5. 14 雨のため作業休み。
5. 15 北壁の土層図実測。記録用写真の撮影。Aトレンチ南側に直交する形のBトレンチ(2m×7m)を設定。重機による掘り下げを行う。炭化物質の広がりは、ほぼBトレンチ全面にみられた。
5. 16 調査区域内の全測図及び地形測量図を作成。遺物を含む炭化物層が広がっているため、調査体制を整えての再調査が必要。

第2次

- S57. 7. 8 調査区の設定。重機による表土剥ぎを開始し、終了後平坦にするための鶴巣がけ。4時前より雨が降り出したため、前の調査の遺物の洗浄。
7. 9 調査区の壁面の垂直落とし、調査区周辺の草刈り。
7. 10 調査区の壁面の垂直落とし。調査区内の鶴巣がけによる削平。

7. 11 調査区の壁面の垂直落とし。
調査区平坦にした面にみられた土層の境目と松木掘の落ち込み面を確認するため、サブトレンチを西北と東南に設定し、掘りはじめる。
7. 12 北壁の土層面を垂直にし、鎌でならすのと同時に、壁際に幅1mのサブトレを設定し振り下げ始める。調査区内平坦にした面にみられる石列の検出をする。
7. 13 石列の検出を続ける。北壁の土層図の作成。西側南北のサブトレに、暗渠がかかっており、検出を始める。
7. 14 暗渠水路の検出。東壁土層図、暗渠平面図、遺物分布図の作成をする。
7. 15 調査区を全体的に振り下げる。特に暗渠のある西側を重点的に下げ遺物分布図の追加を行う。
7. 16 西側暗渠の掘り下げ。他の地点より深くなつておき、遺物は瀬戸の菊皿片、青磁片、漆器片、カワラケ片、古錢、溶融物（銅）付着土器片等と豊富に出土した。午後雨が降ってきたので、2時をもって作業は打ち切りとする。
7. 17 各種図画の作成及び、検出遺構の消掃と写真撮影。器材のかたづけ。

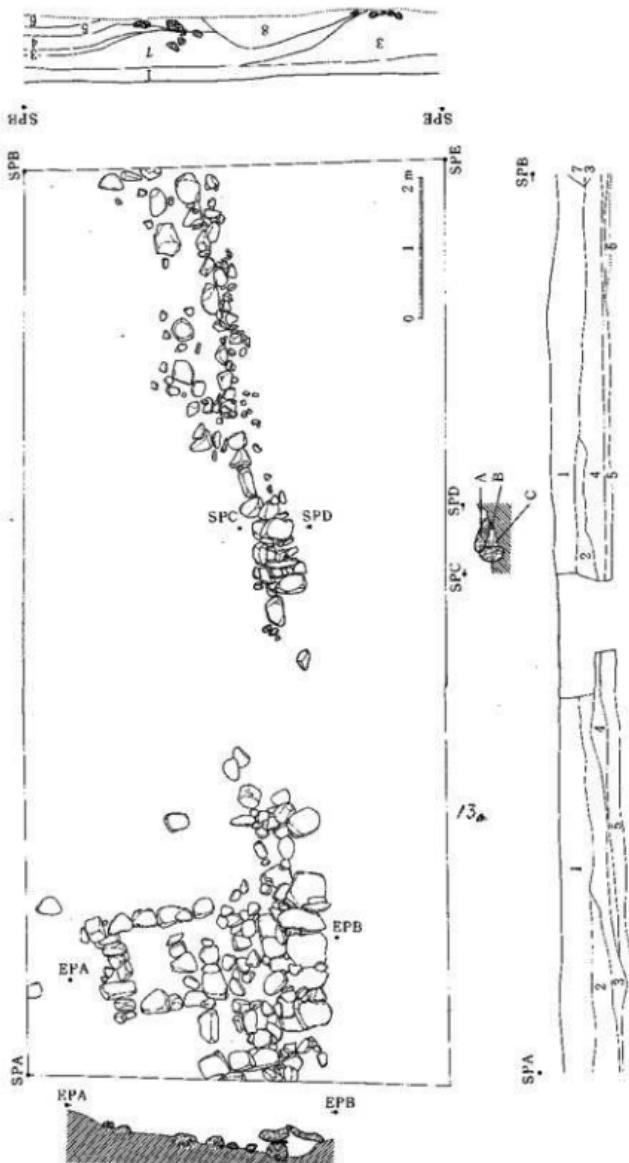


第28図 F地点調査区位置図 S=1/2

層序

本地点の層序は、以下のように分層された。

- 第1層 黒褐色土層
- 第2層 褐色粘土層（小礫を少量含む）
- 第3層 褐色粘土層（礫を多量に含む）
- 第4層 黄褐色粘質土層（小礫を少量含む）
- 第5層 黒褐色粘質土層（遺物・炭化物を含む）
- 第6層 茶褐色粘質土層（炭化物を含む）
- 第7層 褐色土層（小礫を少量含む）
- 第8層 黄茶褐色土層



第29図 F地点調査区全体圖 平面図 S=1/80

遺 構

(1) 暗渠水路

炭化物が多量に混在する第5層は、第6層上面に観察される生活面上にあった建物が焼け生成されたように、焼土や炭化物を多量に混在する。調査区の中央部東半に当初確認された水路と思われる石列の直上は、この5層によって覆われていた調査時において、この面で薄く剥ぐことができ、検出は要易であった。

水路の石列は、北側にのみ1列存在するだけである。長さ15~50cmの石を使い、石列の南面が直線になるように配置されている。水の流れる部分のこの石列の南側には、褐色粘土が幅約20cmにわたってつめられている。これは、水路の底や南側に水が浸み出すことを防ぐ役割をはたすものであろう。

この石列の中央部と西側には、蓋石が載せられており暗渠となっている。中央部では、約50cm位の丸味のあるやや平たい石を乗せている。やはり南側に対峙する石列がないために、蓋台は斜めに立てかけられており、水路としての空間の断面は三角形を呈す。この部分には、底につめられた粘土はほとんどなく、第29図にみると第C層の黒色土層のみが水性の堆積物であり、第A・B層は水路の機能が終了した後の堆積した土層であろう。

この西側は、石が抜かれたためか石列は存在しないが、石列の延長上に約2.5m先には遺存状況のよい暗渠が存在する。東側とは約40cmの比高差をもつが同一のものであると判断される。石は北側に、長径20~30cmの石が2段に積まれ、その上に長径50~60cmの平板状の石が蓋石として載せられている。この平板状の大きな石の境には、20~30cmの石ですき間がなくなるようにふさいである。南側にはやはり石ではなく、水路の空間の断面の形は三角形を呈する。蓋石を一部はずしたところ、今だに空間が保たれており、以前水が流れいた痕跡を留める。水路の水は、その傾斜から東から西へ流れたものである。

(2) 石段状造構

調査区の西側、前述の西側暗渠の北に接して存在する。石段状の石列は、東西方向のものが2~3段、南北方向のものが3段見られる。東西方向の石段部分は、最上部では、長方形で柱状になるような石の長軸を南北にとり、約1.2mの長さで配列している。2段目は最上部から約1m南に5個の石が列状になるが、企画性がはっきりしない。この南約40cmには、4個の石を並べた石列がある。大きさは、西側が大きく東に小さくなる。この南の暗渠までの間には、径20~30cmの石が規則性がなく散在する。最上段からの比高差は、約40cmである。この石列は、規則性があまりなく、石列の上面もそろっていない点から南北の石段に伴うものかもしれない。

南北方向の石段は、部分的ではあるが3段確認される。最上段のものは、長径30~50cmの石が5個配列されている。西側の面がそろっているが、上面は南に低くなっている。2段目は、約1.2m西側に、同様の大きさの石が3個並ぶ。やはり西面がそろっており、上面は南

に低くなっている。3列目は、2列目から約1.1m西に、長軸が40~60cmの石が3個存在する。この石列も西面がそろい、上面南側が低く傾くものである。調査区域内では、以上の3段が確認されたが、西側にまた何段か存在する可能性がある。

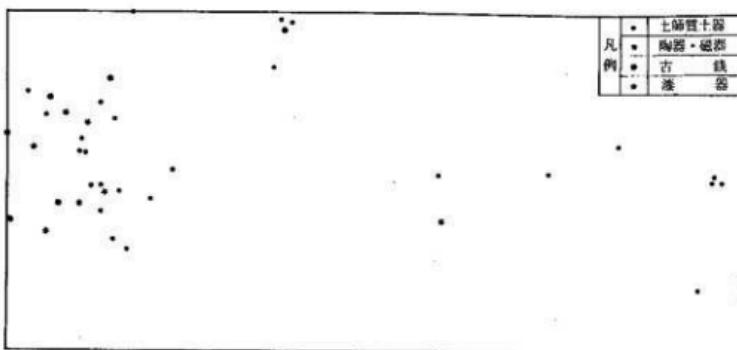
これら石段状の配石は、南北方向のものが規則性があり、東西方向の一一番しっかりしている最上段のものが、南北方向の石段の北側の上止め用の石積みであったと解することが一番妥当のように思われる。松木掘に閉まれた梅翁曲輪への西北からの出入口としての構築物であったと考えられる。なお、この配石の分布は第5層には及んでおらず、第6層中に構築されたものであり、石と石の間からは、古銭、土師質土器片、陶器片や漆器片などの遺物が多く検出された。特に、土師質土器片の多くに、銅と思われる熔融物が付着して、2次的な焼成を受けている点が注目される。

(3) 磨 石

東側の暗渠の石列の北側に沿って、平坦面を上にした長径30~50cmの石が並んでいる。この石も、水路の石列同様上部に5層が覆っており、生活面の検出が容易であった。5個の石が確認できるが、東壁から3個目と4個目の間に、石が抜かれた凹みが存在する。この石をも含め、石と石の中心までの距離は、60cmの等間隔になるように配置されている。石は3.3mの長さで並られるだけであるが、東壁にも一部かかっている石があり、さらに東に延びていることが想定される。

これらの石は、礎石と考えると、南北に対応する石が1間幅以上にわたってみられないことや幅が狭い点の疑問が残るもの、水路の石と同一平面上にあり、底の礎石と対する雨だれ水の水路として両者を結びつけて考えられないであろうか。特に、礎石らしき石の存在する部分の水路は、蓋石のない開渠となっている。これは、構造上この建造物の雨水を集め流すための水路となっているためで、礎石のない部分が邪魔にならないように蓋をかけて暗渠としている点と違いがみられる。

礎石でないとした場合の遺構の性格としては、幅が約60cmの等間隔であり、大人の歩幅と一致することや上面が平坦なことから、通路のために設けられた飛び石としての可能性があることを指摘しておきたい。



第30図 F地点遺物分布図 S = 1/500

遺 物

(1) 出土状況

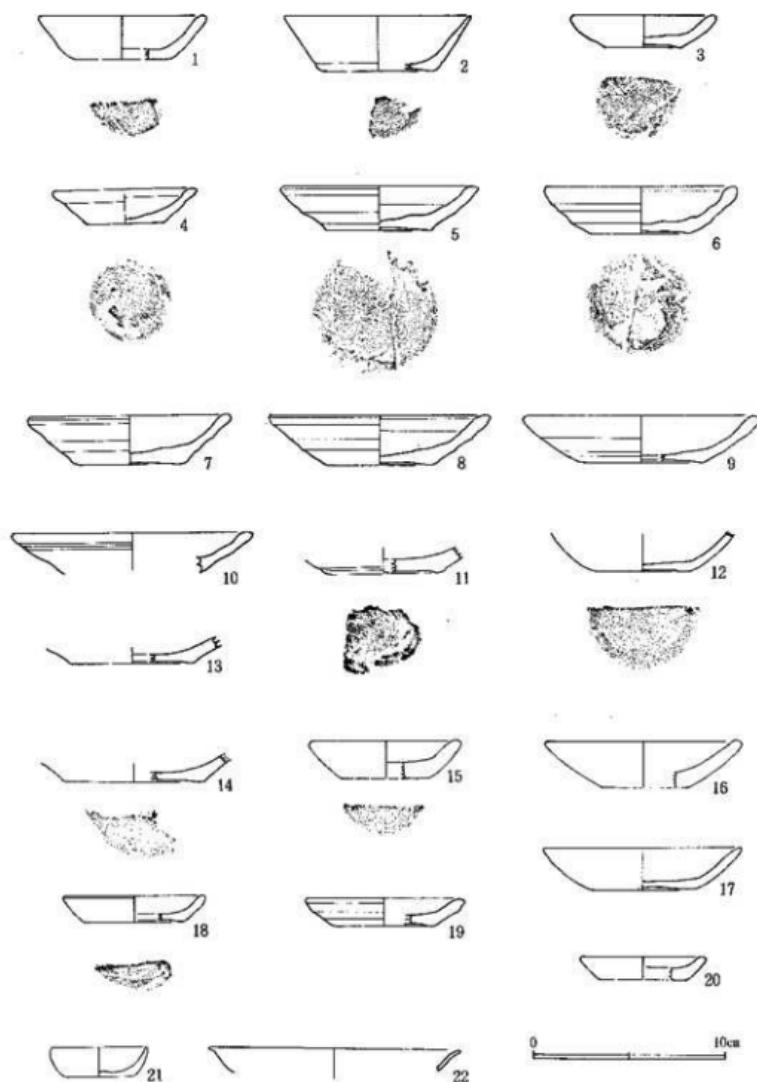
本地点出土遺物は、土師質の皿形土器・火鉢・掘鉢・捏鉢・陶器の瀬戸菊皿や明時代の染付・白磁・青磁の輸入磁器類・北宋銭・漆器の残欠などの多種にわたっている。これらは、第5層の炭化物が多量に含まれる土層中に含まれており、調査区西側の石段状造構の付近にやまとまりをみせる。東側部分では、遺物は少なく散漫であるが、焼土・炭・灰などを特に多量に含む層中に含まれる。東側の水路や礎石の部分の直上にあたる位置である。

(2) 土師質皿形土器

F地点出土の土師質皿形土器を第31図・第32図に示す。分類については搬入によると思われるもの(21・22)、溶融物が付着しているもの(23~36)を除いてG地点の土師質皿形土器と同じ基準を用いた(P43参照)。また第1表~第3表にかけて法量、色調等を示す。その表中の胎土の観において、雲母・赤色粒子・白色粒子の含有量について多・中・少の3段階で表わしているが、その3種の含有物どうしを比べたものではなく、おのおのの含有物について量を3段階としたものであり絶対的な量を表わしたものでもない。(ほとんどの土器において赤色粒子・白色粒子の量に比べ雲母の量が多い。)

本地点出土の土師質皿形土器は、搬入品と思われるものを除いて全体の形態がつかめるもの(口径・底径・器高が測定できるもの)は17点にのぼる。いずれも内面及び外面部はロクロによる模ナメ整形が行われており、外面底部を有するものは糸切り痕を残している。色調は赤みがかった橙褐色を中心であり、胎土は多くのものが雲母・赤色粒子・白色粒子を含む。以下形態を中心に個々の例にふれてみたい。

F地点においては第41図の口径の分布を示すグラフでもわかるように1類は見られない。



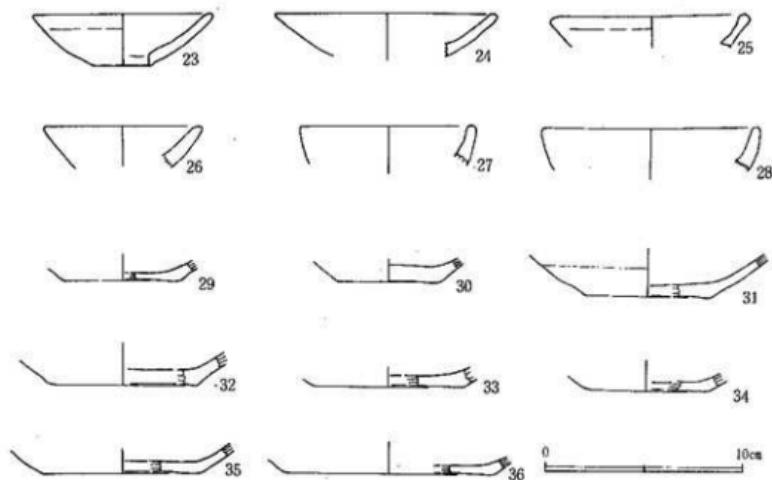
第31図 F地点出土土師質皿形土器(1) S=1/3

第1表 F地点出土土師質圓形土器観察表 (1)

番号	法量(cm)			胎 土	色 調	残存率	備 考
	口径	底径	器高				
1	8.7	5.0	2.3	雲母………中 赤色粒子……多 白色粒子……多 小石を少量含む	暗 橙 褐 色	30%	外面底部から内面口縁部にかけて黒変
2	9.7	5.9	2.9	雲母………少 白色粒子……多	橙 褐 色	25%	
3	7.6	4.0	1.6	雲母………中 赤色粒子……多 白色粒子……多 小石を少量含む	橙 褐 色	40%	
4	7.5	4.0	1.8	雲母………少 赤色粒子……多 白色粒子……多	淡赤 橙 褐 色	60%	
5	10.3	5.5	2.3	雲母………多 赤色粒子……多 白色粒子……多	灰 橙 褐 色	90%	内面は全面、外面は底部から口縁部にかけて全面の半分ほど黒変
6	10.1	5.1	2.5	雲母………少 赤色粒子……少 白色粒子……中	橙 褐 色	80%	
7	10.6	5.7	2.5	雲母………少 赤色粒子……多 白色粒子……多 小石を少量含む	赤 橙 褐 色	65%	
8	11.6	5.6	2.6	雲母………少 赤色粒子……多 白色粒子……多	橙 褐 色	70%	高台風
9	12.3	6.4	2.5	雲母………少 赤色粒子……多 白色粒子……中	淡赤 橙 褐 色	25%	
10	12.1	-	-	雲母………少 赤色粒子……少 白色粒子……多	赤 橙 褐 色	-	
11	-	6.1	-	雲母………少 赤色粒子……中	淡赤 橙 褐 色	-	高台風
12	-	5.0	-	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……中	橙 褐 色	-	高台風
13	10.3	4.5	2.4	雲母………中 赤色粒子……多 白色粒子……多	赤 橙 褐 色	20%	内外面口縁部が黒変

第2表 F地点出土土器質圓形土器觀察表 (2)

番号	法量(cm)			胎土	色調	残存率	備考
	口径	底径	器高				
14	-	7.4	-	雲母………中 赤色粒子……多	赤 橙 褐 色	-	多面底部から体部にかけて黒変
15	8.0	4.6	2.0	雲母………少 赤色粒子……多 白色粒子……中	赤 橙 褐 色	30%	
16	10.3	4.5	2.4	雲母………中 赤色粒子……多 白色粒子……多	赤 橙 褐 色	20%	内外面口縁部が黒変
17	10.3	5.4	2.2	雲母………多 赤色粒子……少 白色粒子……中	橙 褐 色	35%	高台風
18	7.5	2.6	1.4	雲母………少 赤色粒子……多 白色粒子……中	赤 橙 褐 色	25%	
19	8.4	5.4	1.5	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……中	赤 橙 褐 色	20%	
20	6.1	4.1	1.2	雲母………多 赤色粒子……少 白色粒子……中	橙 褐 色	30%	
21	4.9	3.5	1.8	胎土緻密 赤色粒子を少量含む	白 橙 色	35%	
22	13.1	-	-	胎土緻密	白 橙 色	-	
23	9.0	3.0	2.1	雲母………中 白色粒子……少	外面 淡黄褐色 内面 暗灰褐色	20%	内面に赤褐色・黒緑色溶融物付着
24	11.3	-	-	雲母………少 白色粒子……少	外面 暗灰褐色 内面 -	-	内面に黒褐色・青緑色・赤褐色溶融物付着
25	10.1	-	-	白色粒子……中	外面 暗灰褐色 内面 -	-	内面に黒褐色・黄褐色・赤褐色溶融物付着 外面につぶ状に黒褐色溶融物付着
26	8.0	-	-	白色粒子……中	外面 暗灰褐色 内面 -	-	内面に黒色・赤褐色・青緑色・外面口縁部にはみ出して黒褐色溶融物付着



第32図 F地点出土土師質皿形土器(2) S=1/3

II類についてはII Ab・II Ba・II Bb・II Ca類が存在し、II Ab類としては1・2があげられる。2は胎土についても他のものとは異なっており、直線的に口縁部に向かって器厚が薄くなっていく体部をもつ杯形を呈し、他に類例を見ない。II Ba類として確実に判断できるものは3~10であり、11・13・14も外腹底部端から体部にかけての立ち上がり方によりII Ba類と考えられる。5は器面の3/4程度が黒変しており、胎土についても含有粒子の量が多く特異である。11・12は、糸切り底の端を微妙に高くした高台風の作りを持つものである。II Bb類としては器厚の厚いもの(15・16)器厚の薄いもの(17)があり、16は口径の長さに対する底径の長さの割合が小さな値をもつものである。その他II Ca類として18・19、III Cb類として20があげられるが、II Cb類・III Ca類に該当するものはない。

21、22は前述したように搬入によるものと思われるもので、器厚が薄く白橙色を呈し、胎土は非常に緻密である。同類と思われるものがG地点において4点出土しているが、器形については類似しているものは見当らない。

最後に溶融物付着の土師質土器であるが、いずれも小破片であり器形については十分な言及はできないところであるが、23~28については体部の角度によって3つに分類することができる。つまり23・24に比べ25・26は体部の角度が大きくなり、27・28についてはさらに進みしかも口縁部が内湾ぎみになっている。23は口径の長さに対して極端に底径の長さの割合が小さくなるものである。27~34はいずれも底部端から体部にかけての立ち上がり部分を持

第3表 F地点出土土師質皿形土器觀察表 (3)

番号	法量(cm)			胎 土	色 調	残存率	備 考
	口徑	底徑	器高				
27	8.9	-	-	雲母……少 白色粒子……中	外面 暗灰褐色 内面 -	-	内面に黒褐色・青緑色溶融物付着 外面口縁部にはみ出して黒褐色溶融物付着
28	11.0	-	-	雲母……少 赤褐色粒子……少 白色粒子……中	外面 灰褐色 内面 暗灰褐色	-	内面に黒褐色・青緑色溶融物付着
29	-	5.9	-	雲母……少 白色粒子……少	外面 淡黄褐色 内面 黑灰色	-	内面に黒褐色・黄褐色・赤輝色溶融物付着
30	-	5.0	-	雲母……中 白色粒子……少	外面 淡黄褐色 内面 黑灰色	-	内面に黒褐色溶融物付着
31	-	6.3	-	雲母……少 白色粒子……少	外面 淡黄褐色 内面 黑灰色	-	内面に黒褐色・黄褐色・緑色溶融物付着
32	-	7.4	-	雲母……中 白色粒子……少 小石を少量含む	外面 灰褐色 内面 黑褐色	-	内面に黒褐色・青緑色溶融物付着
33	-	7.5	-	雲母……少 白色粒子……中	外面 暗黄褐色 内面 黑褐色	-	内面に黒灰色溶融物付着
34	-	5.9	-	白色粒子……少	外面 黑灰色 内面 -	-	内面に黒褐色溶融物付着
35	-	7.9	-	白色粒子……少	外面 灰褐色 内面 -	-	内面に黒褐色・青緑色溶融物付着
36	-	10.5	-		外面 灰褐色 内面 -	-	内面に黒灰色・外面底部に黒褐色溶融物付着

- (1) 第31図 F地点出土土師質土器 ⅠAb類(1・2)、ⅠBa類(3・4・5・6・7・8・9・10・11・13・14)、ⅠBb類(12・15・16・17)、ⅡCa類(18・19)、ⅡCb類(20)、搬入によると思われるもの(21・22)
- (2) 第32図 F地点出土溶融物付着土師質土器

つものと思われる。溶融物は黒褐色をベースに黄褐色・青緑色・赤褐色などの溶融物が部分的なかたまりとなって付着しており、液状のものが冷却された際の気体が抜け出した跡と思われる小穴が多数見られる。また付着している面はいずれも内面であり、ほとんどが口肩部近くまで付着が見られ一部はみ出したもの(26・27)外面部に付着したもの(36)、さらには割れ口に付着しているもの(31)もある。付着していない個所についても2次的な加熱により灰色に変色している。胎土については表によると雲母と赤褐色粒子が少ない傾向があるが、これも2次的な加熱によるものと考えられる。

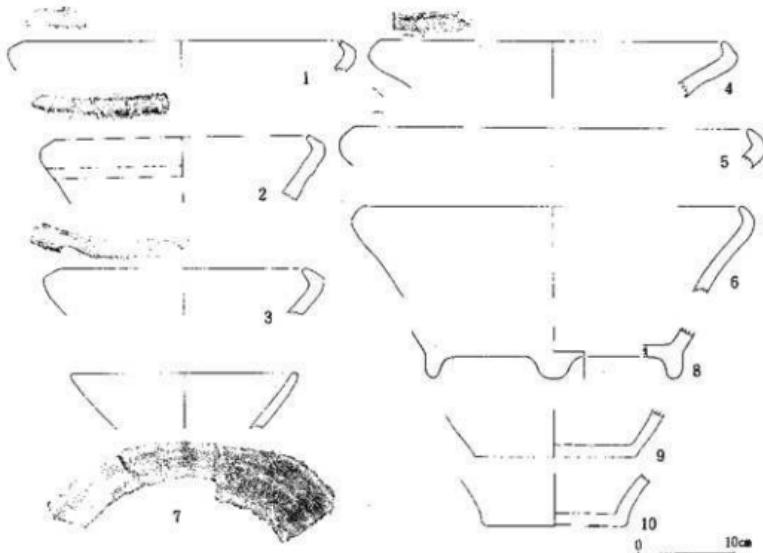
(3) 鉢 類(第34図・写真図版19)

本地点から土師質土器として、前述の所謂かわらけの他に、擂鉢・捏鉢・火鉢の鉢類が発見された。他の遺物同様に、調査区の西側に存在する石段上遺構の付近の第5層中よりの出土である。出土個体数は、以外に多いものの全形をうかがうことのできる資料は皆無であった。

1～6は、口縁部が内湾する火鉢の破片である。1～5までは、屈曲する上面に菊花状のスタンプ文が付されている。このスタンプは、1～4が径1.5cmの大きさで、5が1.0cmである。口縁部の形状もこの2者でやや異なる。口径は、30～40cmの大きさで、厚さは1.2～1.5cmを測る。胎土には、雲母が顯著にみられ、赤色粒子も混じる。1と2は、白っぽい明褐色と赤褐色の2種類の粘土の混ぜ合わせによって、断面に互層をなす縞がみられる。

7は、擂鉢の破片である。口径23cm、高さは10cm位になると思われる。スリ目は、4本までは確認できるが浅めで均一な深さになっていない。他に小破片でスリ目の明瞭な破片が10点ほど出土している。

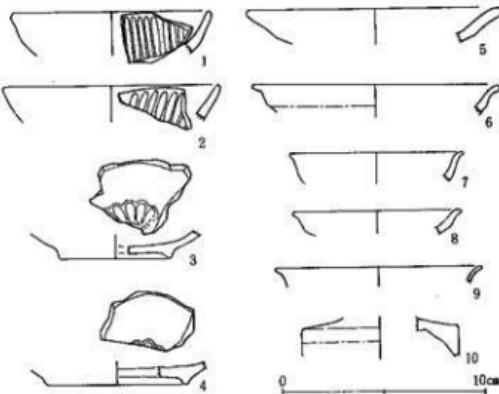
8～10は火鉢の底部で、内外両面とも二次的な加熱によって黒変している。9は、1か2の底部と思われ、断面に2種の粘土の縞がみられる。他に捏鉢の小破片もある。



第33図 F地点出土鉢類 S=1/6

(4) 陶磁器 (第34図・写真図版18下)

1～8は、美濃産の灰釉菊皿の手のものである。1・2は、内面に花弁状の彫り込みがあり、3・4は、底部に菊の印文花が施されている。20余片の出土がみられ陶器の過半数を占める。10は須恵質の焼きもので、薬壺の蓋と思われる。江戸期のものとして、白色の無地志野や瀬戸の铁釉のかけられた破片も出土している。輸入品として、9の中国明時代の白磁や元時代の龍泉窯の青磁・明代の染付碗がみられる。調査区西半に分布が集中する。



第34図 F地点出土陶磁器

(5) 古 錢 (第36図)

本地点からは、7枚の古銭が出土している。腐蝕が進んで遺存状態の悪いものが多く、調査時点では判明したものは「天禧通宝」と「永樂通宝」の2点であった。銭貨自体がもろくなっているものが多いため、酢酸につけ錆を少しづつ落として判読を試みた。初鋤年代順に「開○通宝」・「天禧通宝」・「景祐元○」・「元豐○宝」・「元符通宝」・「永樂通宝」の文字が判明した。

1が唐銭、7が明銭である他はすべて北宋銭である。

(6) その他の出土遺物

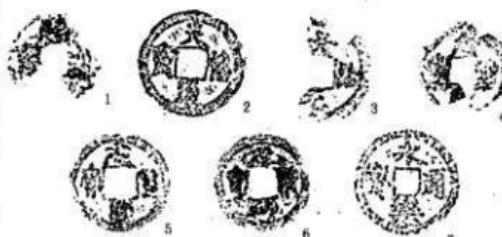
1は、鉄釘と思われるもので、断面形は隅丸方形を呈す。2は、刀子の刃先である。現存長6cm、鋒は詰まって猪首状になっている。断面の割れ口を観察すると、何層にも折り返されて作られている。3は、外側が銅で内側が鉄の円形をした金具である。4は基石かと思われる黒く光沢のある小石である。

本地点の西側では多種の遺物がみられ、図で示したものその他に、漆器片、溶融物などが目を引く。漆器片は総数約20点、木質部は完全に腐ってしまい黒漆と赤漆の一部のみが残存している。この赤い表面には、金粉によって文様が描かれているものも約半数ある。

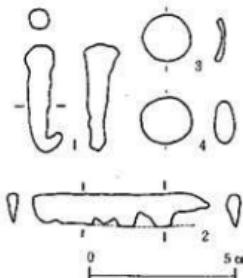
溶融物は、多孔質で黒色を呈し周囲に茶褐色の鉄錆がつく。径1.5cm位の大きさである。

第4表 古銭観察表

No.	銭貨名	初鋤年	外縁径 cm	内縁径 cm
1	開元通宝	不 明	2.3	2.0
2	天禧通宝	1017～21	2.5	2.0
3	景祐元通宝	1034	2.6	2.1
4	元豐通宝	1078	2.3	1.9
5	元豐通宝	1078	2.1	1.9
6	元符通宝	1098	2.4	1.9
7	永樂通宝	1408	2.5	2.0



第35図 F地点出土古銭 S=2/3



第36図 F地点出土鉄器その他

(9) G 地 点

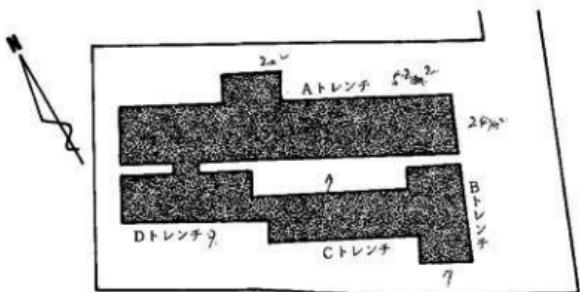
は じ め に

本調査地点は、甲府市屋形三丁目2545番地、深沢宅の改築工事に伴う緊急発掘調査である。古絵図によると、梅翁曲輪のほぼ中央部に位置する。過去において隣接地の西と西南の2地点で、発掘調査が行われており、西南地点からは水路の石列が発見されている。

発 挖 調 査 日 誌

昭和57年度 屋形三丁目2545 深沢芳三宅

- S57. 6. 20 Aトレーナチを設定し、表土及び2層を掘り始める。西側地表下30cmの所に石の混ざった溝状の落ち込みを発見。
6. 21 昨夜の雨のため、調査区内に溜った水のかきだし作業後、Aトレーナチ東側にみられた石の南側にBトレーナチを設定し掘り下げ始める。
6. 22 Bトレーナチを掘り下げる。Bトレーナチほぼ中央に東西に走る水路発見。これを追う形で東西に長くCトレーナチを設定し、掘り始める。
6. 23 Cトレーナチの水路の石列を検出する。Aトレーナチ西の溝の延長上の廃土の移動を行う。
6. 24 Aトレーナチ北側の廃土移動の範囲を広げる。DトレーナチをCトレーナチの西側に設定し、水路の石列を追う。
6. 25 Dトレーナチは、旧建物の基礎のコンクリートが残っており、これをこわしながら掘る。石組の一部と思われる石が検出されはじめる。
6. 26 Aトレーナチ北側の廃土移動した部分を掘り下げる。石列を出すためにAトレーナチとCトレーナチの間の土を除去する。B、C、Dトレーナチの清掃をする。
6. 27 Aトレーナチ西側の石の実測図、Aトレーナチ北壁東西セクション図及びB、C、Dトレーナチ水路石列平面図の作成。
6. 28 Aトレーナチ西側の溝と思われた石の部分をたちわる。幅が確認面で40cm位であったが実際は1m以上もあり、深さも1mを超えるようである。調査区の全体図を作成する。
6. 29 溝の石を見通し図に書き加えながら、サブトレを掘り下げる。
6. 30 遺物の位置を平面図に追加しながら、溝（堀）のサブトレを掘る。掘り上がった後土層セクション図を作成。調査区全体図の追加を行う。最終日ながら、かわらけ等が多量に出土した。土地所有者や近所の人が見学に来た。



第37図 G地点トレーニング配置図 S=1/200

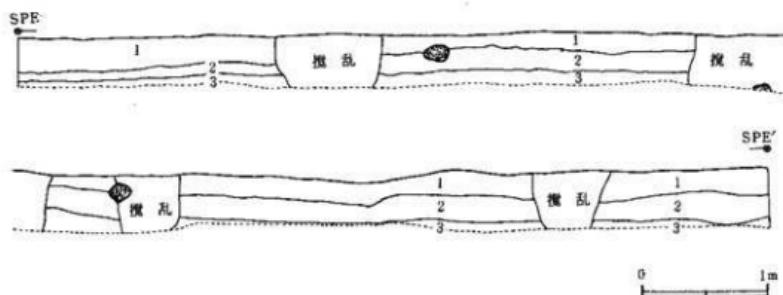
序

第1層 茶褐色粘質土層 基本的には径2~5mm程の小石を含む粘土質の上層であるが、旧建物の基礎や巻太一人頭大の石が混ざり瓦礫の類も多く含まれる表土層である。

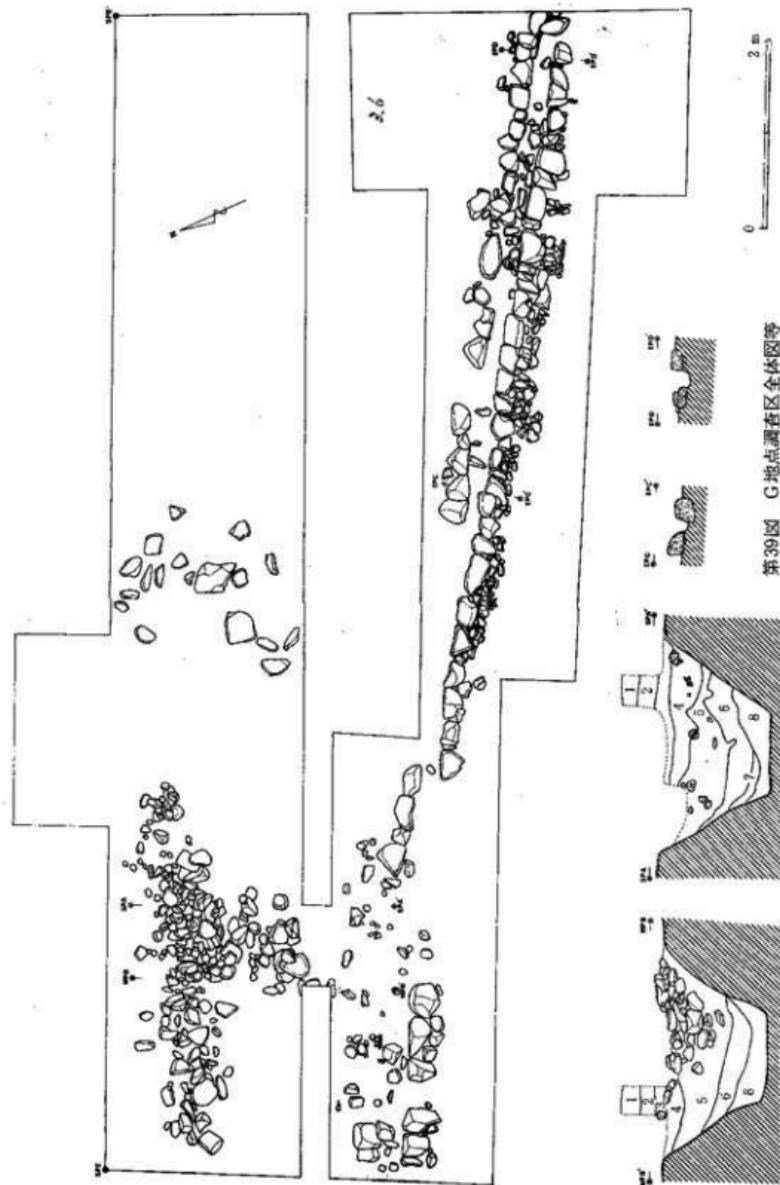
第2層 明茶褐色粘質土層 径1~10mm程の小石や炭化物を含む粘質土層である。第1層より明るくやや粘性が強い。

第3層 暗茶褐色粘土層 径1~3mmほどの小石や土師質土器片などの遺物や小炭化粒子も含まれている。粘性が強い。

第3a層 喰茶褐色粘土層 基本的には、第3層に近いが、含まれる小石の径が3~10mmとやや大きく量が少ない点と炭化物が多量に含まれる点が異なる。堀の上面に部分的に存在する土層である。



第38図 G地点北壁土層図 S=1/50



第39図 G地点調査区全体図等

検出遺構

(1) 水路

調査区のB・C・Dトレンチに12mにわたり確認された。水路の高低差から、西北→東南に水が流れる構造となっている。この水路の石列を構成している石は、20~40cmの角の丸い山石が使われ、東側では径10cm前後の裏込め用の石が存在する。石は、内側が一直線上にそろように配置されており、間隔は約15cm幅である。底部には、特別に石が敷かれた形跡は認められないが、東側の一部には10cm前後の石が存在する。水路石列の断面から石の最高部と底面との比高差は10~15cmある。石は1段で並ぶが、東側の一部には、石が2段に積まれている部分もある。水路の石列は、東側半分はほぼ完存するものの、西半分は所々石が抜き取られている。ほとんど直線上に並ぶが、検出された部分の1/4以西は、角度を西に変えやや屈曲する。後述する溝との前後関係は、溝が埋められた後に、水路の石列が構築されている。

(2) 溝

調査区Aトレンチの西側に、ほぼ東西方向に長軸をもつ径5~20cm大の石の集積がみられた。この石の間には、かわらけ完形品や陶器が含まれていた。第3層及び第3a層の下部に確認されたもので、当初小さい溝と想定されたものであった。約1m幅でその断面を立ち割った結果、より大きな溝の上部にみられる石を含む埋められた土層の一部であることが判明した。

溝の堆積土層は、標準土層の第3層の下に4層確認された。以下に溝の堆積土層の説明を記す。第4層灰褐色土層、かわらけ片や炭化物を含み、粘性もやや強い。第5層暗灰褐色粘質土層、西北側上面には径10~25cm程の石や炭化物、かわらけ片、陶器片を多量に含む。あたかも溝の埋没してゆく途中の段階で、石や木材・遺物等が一括廃棄されたような堆積状況を示すと思われる。石が集中する部分以外でも、径10cmほどの石が所々にみられ、粘性は本堆積土層中最も強い。第6層黄褐色土層、非常にしまりがあり、径3mm以下の砂粒を多量に含む。弱粘質の土層であり、炭化物、かわらけ片をまれに含む土層である。第7層灰色粘質土層、木片が若干見られる他は、ほとんど混在物のない粘質の土層である。第8層黄褐色土層、若干の遺物と、径5~10mmの小石を含む砂質土層である。溝の最下部には部分的に薄く灰色粘質土層がみられる。

溝の構造は、上面の幅2.8m、底面幅1.1m、深さ1.4mを測り箱掘形を呈する。発掘調査地点の諸々の制約から、一部分のみの検出ではあったが、ボーリング棒による探査などから調査区域外へも延びていることが確認された。溝の方向は、武田氏館跡の主郭の東西方向の堀とはほぼ一致する。溝の掘り込まれている土層は、茶褐色でしまり・粘性とも十分に堅い土層である。規模としては、それほど大きくはないが、整然とした造りであり、基盤もしっかりしている堅固な溝である。

遺物

(1) 出土状況

本地点出土遺物は、主に調査区北側を東西方向にはしる溝からの出土である。この溝の覆土である第5層を中心とする径20~50cmの大きさの石に混在して土師質皿形土器や陶器等がみられた。溝の西側上面で、本地点出土遺物の9割以上を占める。なお一部の陶磁器片は、遺物の出土位置が高く溝との関連では捉えない方がよいかと思われる。

(2) 土師質皿形土器

G地点出土の土師質土器に直接ふれるまえにF地点の土師質土器も対象とした分類基準について言及しておきたい。

法量的な関係（口径・底径／口径・器高／口径）を第41図に示す。3つのグラフとも分布の中心となる範囲を持つ半面、掛け離れた値を持つものがあり、器高／口径のグラフ以外はF地点とG地点では異なる傾向を示していることがわかる。

法量及び形態により下記の3段階の基準を設け、その組み合せにより分類をおこなった。

◦ 口径が14cm以上のもの I類

◦ 口径が7cm以上14cm未満のもの II類

◦ 口径が7cm未満のもの III類

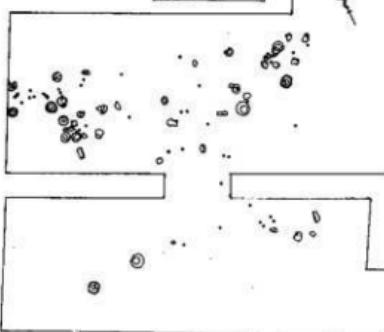
◦ 深めのもの（器内の深さ
／口径が0.20以上を目安（個数）
として） A類

◦ 中くらいのもの B類

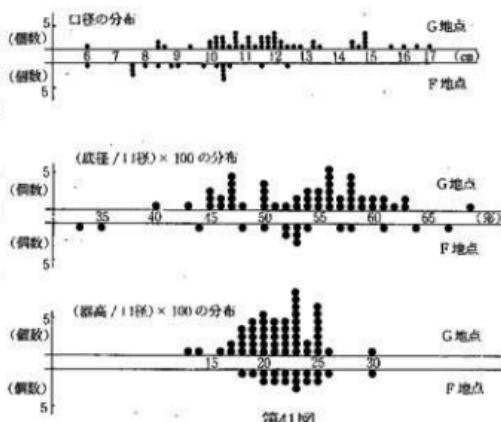
◦ 浅めのもの（器内の深さ
／口径が0.13以下を目安（個数）
として） C類

◦ 外曲底部端から体部にう
つる部分で一度立ち上が
りぎみとなり、口縁部ま
で肥厚なもの a類

◦ それ（a類）以外のもの
..... b類



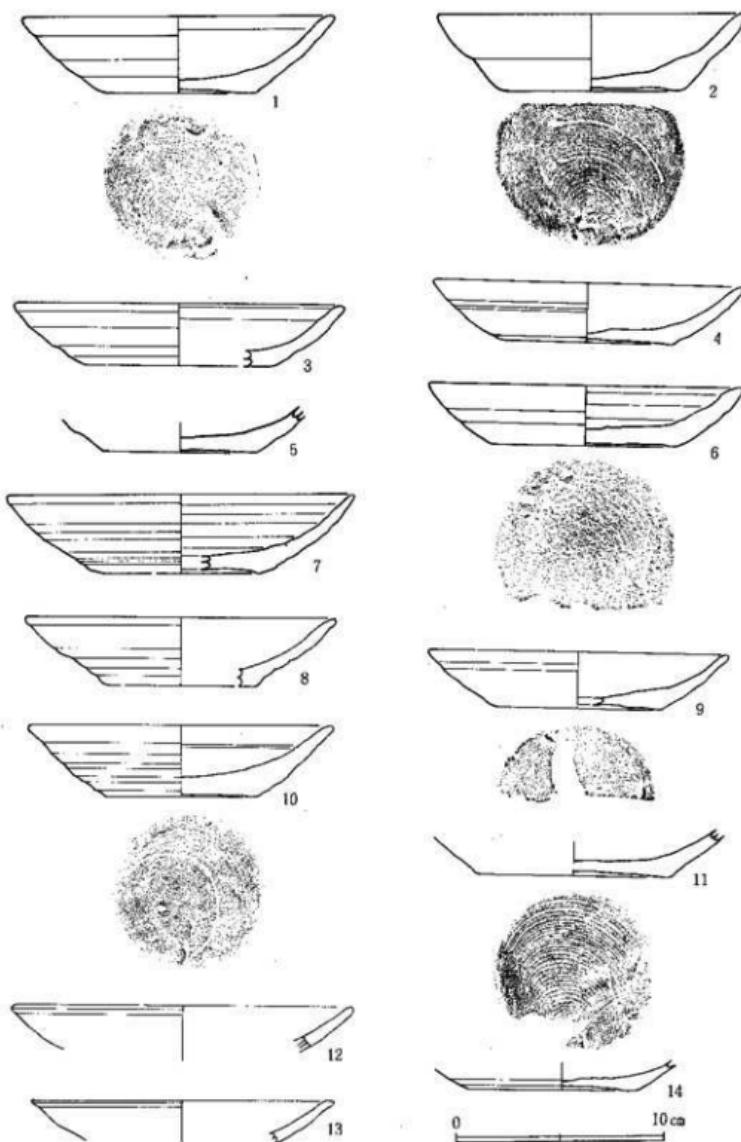
第40図 G地点遺物分布図 S=1/80



第41図

第5表 G地点出土土師質圓形土器観察表 (1)

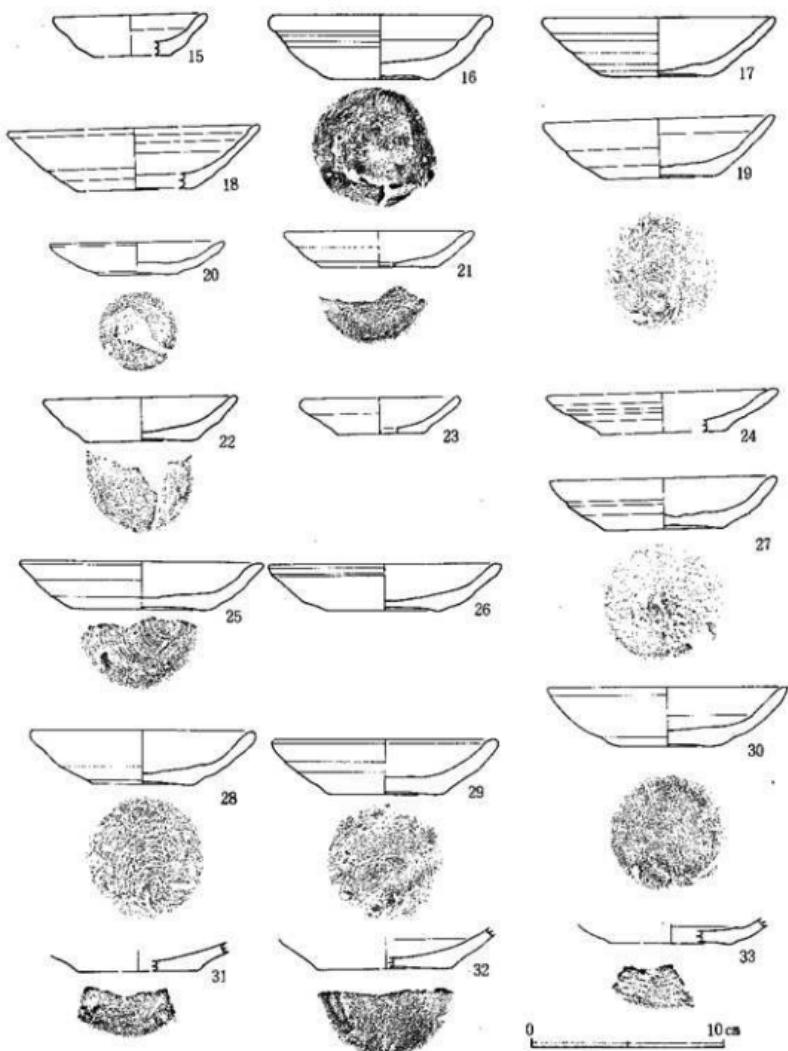
番号	法量(cm)			胎 土	色 調	残存率	備 考
	口径	底径	器高				
1	14.8	7.4	3.7	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少 小石を少量含む	淡 橙 褐 色	80%	外面体部及び内面底部 から体部にかけて黒変
2	14.4	8.8	3.4	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	45%	
3	15.6	9.0	3.0	雲母………少	淡 橙 褐 色	15%	
4	14.8	8.2	2.9	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……中	淡 橙 褐 色	65%	
5	-	7.9	-	雲母………少 赤色粒子……中 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	-	内面底部から体部にか けて黒変
6	14.8	8.6	2.9	雲母………少 赤色粒子……少 白色粒子……少	暗 橙 褐 色	40%	内外面底部から口唇部 にかけて黒変
7	16.6	7.4	3.8	雲母………中 赤色粒子……中	淡 橙 褐 色	40%	高台風
8	14.8	7.0	3.2	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	65%	
9	14.4	8.0	2.7	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	橙 褐 色	40%	
10	16.0	9.2	3.3	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……中	淡 橙 褐 色	90%	内外面底部から体部に かけて黒変、内外面体 部に赤変部分あり
11	-	9.4	-	雲母………少 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	-	内面底部から体部にか けて黒変
12	16.4	-	-	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	-	
13	14.5	-	-	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……中	橙 褐 色	-	内面体部が黒変
14	-	8.2	-	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	-	



第42図 G地点出土土師質皿形土器(1) S=1/3

第6表 G地点出土土師質皿形土器觀察表 (2)

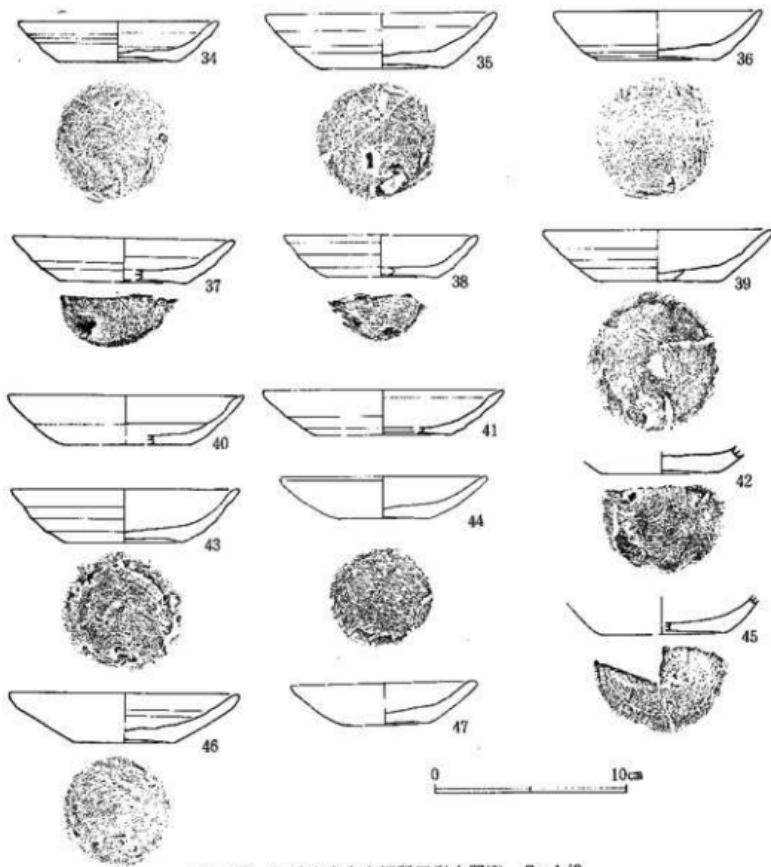
番号	法量 (cm)			胎 土	色 調	残存率	備 考
	口徑	底徑	器高				
15	11.2	7.0	1.5	雲母………少 赤色粒子……中 白色粒子……少	橙 褐 色	35%	
16	11.2	5.0	3.4	雲母………中 赤色粒子……多 白色粒子……少	橙 褐 色	65%	高台風
17	12.0	5.6	3.1	雲母………少 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	55%	
18	13.2	6.1	3.3	雲母………中 白色粒子……少	橙 褐 色	25%	
19	12.3	6.1	3.1	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	橙 褐 色	98%	
20	8.6	4.0	1.2	雲母………多 赤色粒子……少 白色粒子……多	淡 橙 褐 色	60%	
21	9.9	6.0	1.9	雲母………多 赤色粒子……中 白色粒子……少	橙 褐 色	40%	
22	10.1	5.7	2.3	雲母………中 赤色粒子……多 白色粒子……多	赤 橙 褐 色	60%	
23	8.4	4.5	1.9	雲母………多 赤色粒子……少 白色粒子……多	淡 橙 褐 色	30%	
24	11.6	6.6	2.1	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……少	橙 褐 色	15%	
25	12.7	7.0	2.5	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 灰 褐 色	35%	
26	11.8	5.6	2.4	雲母………少 白色粒子……多	橙 褐 色	25%	
27	11.9	6.0	2.6	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……少	淡 橙 褐 色	40%	
28	11.4	5.2	2.9	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……多	橙 褐 色	60%	



第43図 G地点出土土質皿形土器(2) S=1/3

第7表 G地点出土土師質圓形土器觀察表 (3)

番号	法量 (cm)			胎 土	色 調	残存率	備 考
	口径	底径	器高				
29	11.6	6.0	2.9	雲母………中 赤色粒子………中 白色粒子………少	赤 橙 褐 色	100%	口唇部が黒変
30	12.6	5.0	3.1	雲母………少 赤色粒子………中 白色粒子………少	淡 橙 褐 色	99%	外面底部にスノコ痕
31	-	6.2	-	雲母………中 赤色粒子………少 白色粒子………少	橙 褐 色	-	
32	-	7.0	-	雲母………中 白色粒子………少	橙 褐 色	-	
33	-	6.2	-	雲母………少 赤色粒子………少	橙 褐 色	-	
34	10.2	6.0	2.1	雲母………中 赤色粒子………少 白色粒子………少	橙 褐 色	98%	
35	12.0	6.4	2.8	雲母………少 赤色粒子………少 白色粒子………少	淡 灰 橙 色	45%	
36	10.8	6.3	2.5	雲母………中 赤色粒子………少 白色粒子………少	橙 褐 色	98%	
37	11.5	6.7	2.3	雲母………中 白色粒子………中	淡 橙 褐 色	20%	
38	10.1	5.7	2.2	雲母………中	淡 橙 褐 色	30%	
39	11.8	6.4	2.7	雲母………中 白色粒子………少	淡 橙 褐 色	80%	底部に孔あり、内外面 底部から口唇部にかけて黒変、口唇部に黒色 溶融物付着、外面と も体部に赤変部分あり
40	12.2	6.6	2.6	雲母………少 赤色粒子………少 白色粒子………少	淡 橙 褐 色	30%	外面底部から口唇部に かけて黒変
41	13.2	6.6	2.2	雲母………中 赤色粒子………少 白色粒子………少	淡 灰 橙 色	20%	
42	-	5.3	-	雲母………中 赤色粒子………中 白色粒子………少	橙 褐 色	-	

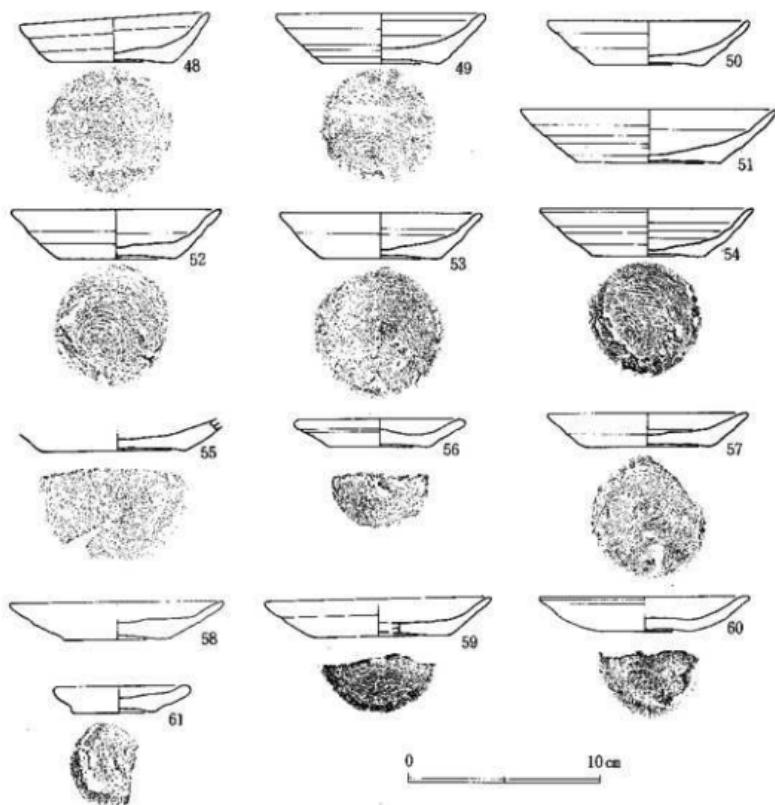


第44図 G地点出土土師質圓形土器(3) S=1/3

土師質圓形土器の分類を行う場合、口径に対する底径の割合、または口径に対する器高の割合はよく用いられるところであるが、今回については口径の分布がかたまりとしての性格を一番表わしていると考え 7 cm と 14 cm を境として 3 つに分類した。深さによる分類は器内の深さ／口径の値（器内の深さは中央部を測定）を目安にしているが、内面底部の形状なども考慮し実際に深く感じるもの、浅く感じるものを選んだ。また a 種については次のように補足しておきたい。まず全体的に厚手であるが、特に口縁部に向かって丸く器厚を増すものもあり、口縁部内側が平らになっているものは見られるが著しく外反はない。外面底部端から体部に移る部分の立ち上がり方は幾種類かに分類できるが外面体部下端のラ

第8表 G地点出土土師質皿形土器観察表 (4)

番号	法量 (cm)			胎 土	色 調	残存率	備 考
	口径	底径	器高				
43	11.9	6.1	2.6	—	灰 暗 色	90%	内外面とも全面的に黒変
44	10.8	5.2	2.3	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 暗 色	55%	
45	—	6.5	—	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 灰 棕 色	—	
46	12.2	5.7	2.5	雲母………多 赤色粒子……中 白色粒子……中	淡 橙 暗 色	70%	外面底部から体部にかけて黒変
47	9.4	4.2	2.2	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……中	淡 橙 暗 色	98%	内外面とも体部に黒変
48	9.9	6.2	2.3	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 暗 色	80%	内外面とも底部から口唇部にかけて黒変
49	10.6	6.0	2.6	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 暗 色	65%	
50	10.4	5.8	2.3	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……中	淡 橙 暗 色	75%	内面底部から口唇部にかけて黒変
51	13.4	7.5	2.8	雲母………中 赤色粒子……少 白色粒子……少	棕 暗 色	70%	内面底部中央及び外面底部から体部にかけて黒変
52	10.8	6.0	2.6	雲母………少 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 橙 暗 色	100%	
53	10.4	6.2	2.4	雲母………少 赤色粒子……少 白色粒子……少	淡 灰 棕 色	60%	外面体部が黒変
54	11.2	5.9	2.1	雲母………中 赤色粒子……少	淡 灰 棕 色	60%	
55	—	7.8	—	雲母………中 赤色粒子……中 白色粒子……少	淡 橙 暗 色	—	
56	8.4	5.2	1.5	雲母………中 赤色粒子……多 白色粒子……多 小石を少量含む	赤 橙 暗 色	30%	



第45図 G地点出土土師質皿形土器(4) S=1/3

インとしてそれを感じさせる顕著ではないものも含める。底部端からの立ち上がり後、体部中央が少々外側へ張り出しがみとなるものが典型と考えているが、立ち上がり後直線的に口縁へと開くものも多い。a類は以上のような総合的な特徴を備えた形態を持つものとする。

G地点出土の土師質皿形土器を第42図～第45図に示す。また法量・胎土・色調などを第5表～第9表に示すが胎土の質の記載方法はF地点と同じである。(30ページ参照)。

本地点出土の土師質皿形土器は、搬入品と思われるものを除いておおよそ全体の器形がつかめるもの(口径・底径・器高が測定できるもの)は50点に及び、色調は淡橙褐色を中心として胎土はほとんどのものが多量の雲母と少量の赤色粒子と白色粒子を含んでいる。以下、

第9表 G地点出土土師質皿形土器観察表 (5)

番号	法量(cm)			胎土	色調	残存率	備考
	口径	底径	器高				
57	10.3	6.2	1.8	雲母………中 赤色粒子………中 白色粒子………少	赤 橙 褐 色	45%	
58	10.8	5.9	2.1	雲母………中 赤色粒子………少 白色粒子………少	淡 灰 橙 色	80%	
59	11.8	7.0	1.9	雲母………中 赤色粒子………少 白色粒子………中	淡 橙 褐 色	20%	
60	10.9	4.7	1.8	雲母………中 赤色粒子………中 白色粒子………少	淡 橙 褐 色	40%	
61	6.1	4.2	1.1	雲母………少 赤色粒子………中 白色粒子………中	赤 橙 褐 色	55%	
46-5	-	6.9	-	胎土緻密 赤色粒子を含む	白 橙 色	-	内外面とも灰色に変色 している部分あり 体部下部にヘラ削り
46-6	-	4.9	-	胎土緻密 赤色粒子を含む	白 橙 色	-	
46-7	11.1	5.6	2.8	胎土緻密 赤色粒子を含む	白 橙 色	95%	
46-8	12.1	7.0	2.4	胎土緻密 赤色粒子を含む	白 橙 色	25%	

分類に基づき形態を中心に個々の例にふれてみたい。

本地点において I 類は14点に及び、I は外面底部端から体部へ移る部分の立ち上がりや口縁部での肥大も顕著ではないが、全体的に見て a 類の要素を有すると思われるため I Aa 類としておきたい。2 は外面体部中央において明確な沈線を持ち、内面体部から底部にかけてが直線的であるため底部端における器厚が著しく増大する特殊な器形である。5 と11は明らかに外面底部端からの立ち上がり部分を持つため 3 と合わせて I Ba 類としておく。I Bb 類は肥厚なもの(6)、内面のラインがなだらかため底部端の器厚が増大しているもの(10)、口縁部が外反ぎみになるもの(8・9・10・13)などバラエティーに富んでいる。

II Aa 類としては 15・16 が該当するが、共に肥厚で体部中央が外側へ張り出す器形を呈している。II Ab 類(17・18・19)は共に直線的な体部を持ち、比較的類似した器形を有して

いる。21~33はII Ba類に属するものであるが、外縁底部端からの立ち上がり方、口縁部の形態、体部中央の張り出し方などおのおの差が見うけられる。本地点におけるII Bb類は22点にのぼる。34~39は器形的には顕著な特徴を持たないものであるが、39は底部に小孔を施したものと思われる。底部にも破れ目が入っており、断言することはできないが、底部外面から内面向てあけられたものと考えられる。40・41は比較的薄手の体部を持ち口縁部内側が平らぎみになっているもので、44・46・47は口径に対する底深の割合が小さく直線的な体部を持つものである。48~54は内面体部から底部にかけてなだらかであるため底部端における器厚が増大し、口唇部にむかって器厚が薄くなっていくものであり、口縁部が外反しないもの(48・49・50・51)と外反ぎみになるもの(52・53・54)がある。II C類は合計6点を数え、a類として20・56、b類としては57・58・59・60が該当するが共に器形はバラエティーに富んでいる。

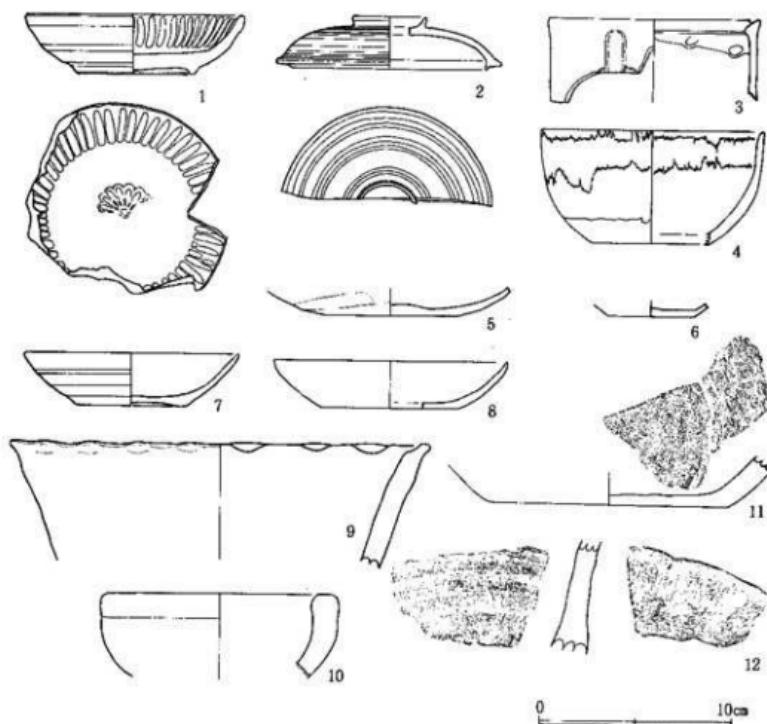
III類はIII Ca類として61のみであり、不整形をなす。

本地点において搬入によるものと思われる土器は4点を数える(45~5~8)。F地点のものと同様薄手で白橙色を呈し、胎土は緻密である。45~5は唯一外面体部下端にヘラ削り痕を持ち、45~7、45~8は不明瞭であるが外縁底部は糸切り底と思われる。

(3) 陶 磁 器 (第46図1~4・写真図版24)

陶磁器は、武田時代の16世紀のものと江戸前期の2つに分けられる。1は、美濃で焼かれた黄瀬戸印花文菊皿である。口径11.3cmを測る。3は美濃の黄瀬戸香炉と思われる口縁部である。表面には、削り出された文様の一部が残る。2は、古伊万里染付千筋文蓋である。厚さや造りの構造などから、碗物の蓋であると思われる。紺青色の同心円状の筋が4本づつ三箇所につく。胎土は灰白色で、所々に黒褐色の小粒子が入る。4は、通称尾呂茶碗と呼ばれる美濃の燒物である。胎釉の上に薬灰釉をかけられたものである。図示できなかったが、古伊万里の染付印判菊花文茶碗の小片がある。これと2~4は江戸時代に入ってから焼かれたものであり、比較的上層からの出土である。他に輸入陶磁として南支で焼かれた白磁皿の破片がある。

- (1) 第41図 G地点出土土師質土器 I Aa類(1)、I Ab類(2)、I Ba類(3・5・11)
I Bb類(4・6・7・8・9・10・12・13・14)
- (2) 第42図 G地点出土土師質土器 II Aa類(15・16)、II Ab類(17・18・19)、II Ca類(20)、II Ba類(21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33)
- (3) 第43図 G地点出土土師質土器 II Bb類(34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47)
- (4) 第44図 G地点出土土師質土器 II Bb類(48・49・50・51・52・53・54・55)、II Ca類(56)、II Cb類(57・58・59・60)、II Ca類(61)



第46図 G地点出土陶器・鉢

(4) その他の遺物 (46図・9~12)

土師質鉢形土器や漆器、鉄製品がみられる。9は、口唇部に指頭によって交互の押えが施された鉢である。10は、水路の石列中からの出土した小型鉢である。口径が12.2cmの楕形を呈す。11・12は搔鉢の破片である。12は、陶器であるが、便宜的にここに入れた。内面のスリ目は、使用のための摩耗によってわずかにその痕跡を留めるにすぎない。

漆器は、数点みられた赤漆の内側に黒漆がみられる。金粉による文様の痕跡が残るものもある。

他に小さい板状の鉄製品もみられる。

(10) H 地 点

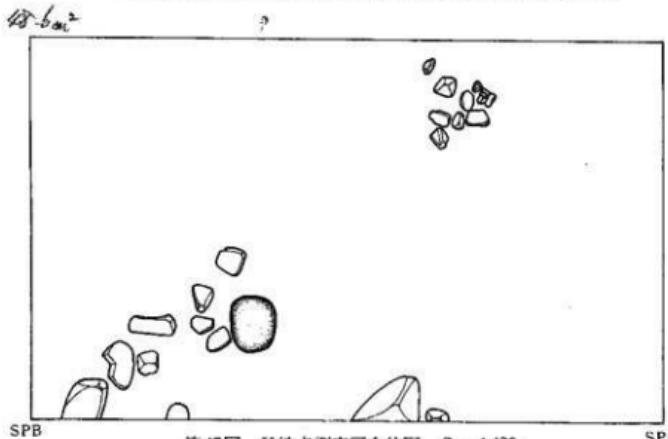
はじめに

本調査は、甲府市大手三丁目3696番地、梅沢宅新築工事に伴う緊急発掘調査である。古絵図によると、馬場美濃守屋敷跡の南東側に隣接する畠地の部分に位置する。

発掘調査日誌

昭和57年度 大手三丁目3696 梅沢公宅

- S57. 7. 20 調査区域を設定し試掘坑を掘り下げ、土層を観察する。
- 7. 21 調査区域全面の表土剥ぎを始める。
- 7. 22 表土剥ぎの続きをする。かわらけ片・縄文土器片が、わずかに出土する。調査区内に水が浸み出る。
- 7. 23 第2・3層を下げ始める。調査区東南部に、カマドの一部と思われる焼成粘土塊の集中がみられる。
- 7. 24 昨日に続き第2・3層下げ、中央やや東よりの部分に花崗岩の風化した径70cm位の石が2個並んで出土。雨のため作業を中断。
- 7. 26 第3層の掘り下げを続ける。
- 7. 27 第3層下げ。「永楽通宝」・石礎・土師質皿形土器片等出土する。
- 7. 28 昨夜の雨のため溜まった水を10時まで汲み出す作業をする。表面の泥を除去し、東壁ぎわと南壁ぎわを土層の確認のため深掘りをする。



第47図 II地点調査区全体図 S = 1/80

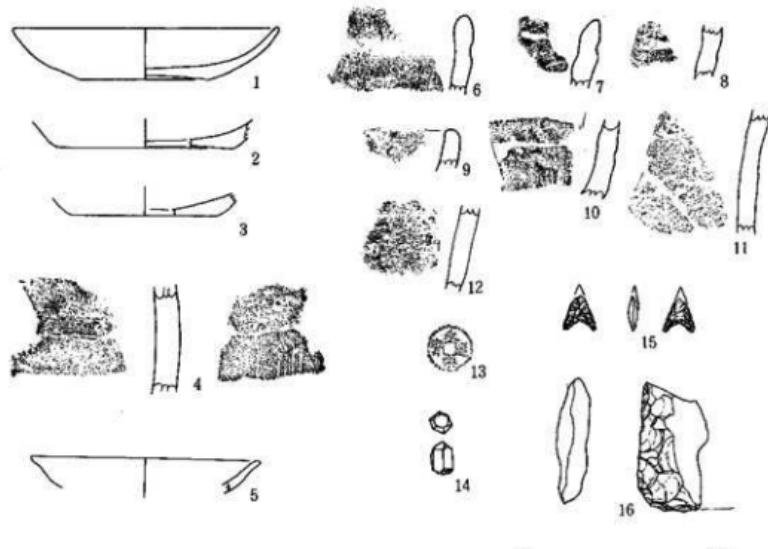


第48図 H 地点 土層図

7. 29 水を汲み出し、ぬかるみを取り除き深掘りをする。
7. 30 浸み出た水を汲み出し、南壁の土層面を垂直に落とす。写真撮影と土層図作成。後に埋め戻しを行い調査区周辺を清掃し調査終了。

層序

- 第1層 明黒褐色土層 畑の耕作土層であるため、しまり、粘性に欠ける。東側10cm、西側15cmの堆積を示す。
- 第2層 黄褐色土層 旧水田の床土であるため鉄分が酸化して黄褐色を呈す。径1~2cmほどの小石や砂が多く含まれており粘性に欠ける。
- 第3層 暗紫褐色土層 径1cm程度の小石を若干含み、非常にしまりのある堅い層である。この層の上位からは、古鏡や土師質圓形土器片等の中世末の遺物がみられた。やや下方からは、縄文時代の土器片や石器が検出された。



第49図 H地点出土遺物

遺物（第48図・写真図版27）

本地点からは、縄文時代の遺物と武田時代の遺物が出土している。

1～3は、土師質皿形土器（かわらけ）である。1は、口径13.5cm、底径6.6cm、高さ2.6cmを測る。やや薄手で淡橙褐色を呈し、胎土に白色の小石や雲母が含まれている。底部は、擬高台風に、縁辺部にやや高まりをもつ。4は、擂鉢の破片で7本のスリ目が観察される。5は、美濃の瀬戸灰釉皿の破片である。13は「永楽通宝」である。外縁径2.4cm、内円径2.1cmを測り、遺存状況の良好な資料である。

縄文時代の遺物として、縄文時代の中期後半の土器片約15点と石器がある。6～8は、口縁直下などに横位の太沈線が施されるものである。橙褐色・灰橙褐色を呈し、白色粒子・雲母を含む。文様が付けられているものは、この3片のみであり、その特徴から縄文時代中期末の曾利式土器と思われる。石器としては、15の石鎌と16の打製石斧がある。石鎌は、灰黒褐色のチャート製のもので先端部を欠くが現存長1.8cmを測る。16は、粘板岩製の打製石斧の刃部付近の破片である。厚さ1.5cm、現存長6.5cmを測る。石器ではないが、水晶が発見されている。上部が透明で下部は白く濁る、いわゆる煙水晶である。水晶は、本県に産地があり鋭利な割れ口をもつところからしばしば石鎌などの小型の石器の原材として用いられている。

調査結果

本地点からは、明確な遺構は検出されなかったが、北東と南西に石の集中がみられた。

北東側の石は、長径20～30cmの大きさのもので、上面はほぼ第3層の上面とはほぼ一致するが平坦になっていない。

東西側の石は、長径30～80cmの大きさのもので、表面は平坦である。地表下25～30cmの所に上面が揃うが、規則性は見いだせない。花崗岩の風化が進んで砂状になった石も含まれている。両方の石の上面はほぼ一致するが、中央部に石が欠ける点や、石の大きさなど差異がある。

ほかに、調査区のはば中央部にかまどの構築材の一部と思われる焼成粘土の集中が確認された。周囲には若干の遺物がみられ、径10cm以下の焼成粘土塊と焼土が25cm×60cmの範囲に広がっていた。

(II) I 地点

はじめに

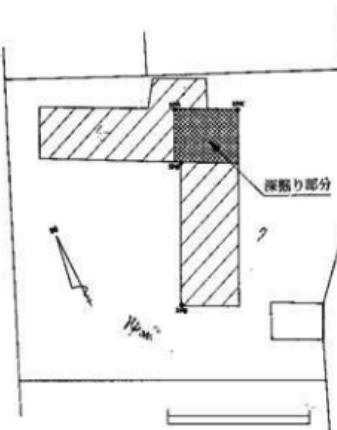
本調査は、甲府市屋形三丁目2563-1及び2番地の長谷部家の改築工事に伴って実施した緊急発掘調査である。調査地は現地形及び古絵図から、梅翁曲輪西側の土壘上に当たる。西側は、通称「松木掘」東側斜面の竹林となっている。同じ土壘の北と南隣接地は、ともに人家となっており、東側は1段下がって人家がたちならぶ。

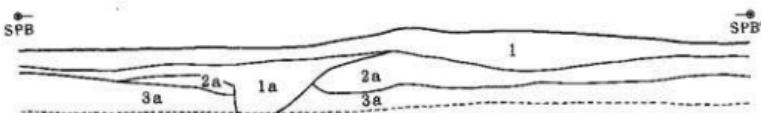
発掘調査日誌

昭和57年度 屋形三丁目2563-1・2 長谷部喜文宅

第50図 I 地点調査区全体図

- S58. 1. 16 調査区を設定。調査トレンチ表土層を掘り始める。
1. 17 土壘上であるため、20cm位掘ると堅い面になり、全面を掘り下げるのが困難なので、調査区東北隅のみ深く掘り下げ様子を見るに付する。
1. 19 土壘の構築状況をみるため、昨日の続きを掘り下げる。
1. 20 最初設定した幅2mの調査区内の壁を垂直に落とし、-50cm位で平坦にする。深掘り部分は更に掘り下げ-190cmのところでかわらけ出土。
1. 21 深掘り部分の一部に灰色の落ち込みが確認されているので、北側にサブトレを入れる。深掘り部分は更に掘り下げ-230cmに達する。
1. 22 深掘り部分を更に掘り下げ-275cmまで達した。-270cm付近に礎石らしい石が検出され、付近よりかわらけ片、陶器片が出土する。
1. 23 南北トレンチを東側より埋め戻しを始める。調査区域の全体図と、東西、南北トレンチの土層図を作成する。
1. 24 南北トレンチ埋め戻し完了。深掘り部分の底面の掘り下げをする。
1. 25 東西トレンチの西側埋め戻し。
1. 26 昨日の続きを、深掘り部分の壁をきれいにし、底面の精査をする。
1. 27 深掘り部分最下層の精査。
1. 28 深掘り部分の分層、底面の精査。
1. 29 最下層の石の周囲の精査。
1. 31 深掘り部分のセクション図の追加と土層説明。土壤サンプルの採取。
2. 7 深掘り部分の埋め戻し。
2. 8 埋め戻し完了する。調査区周辺の道路の清掃、器材の撤収を行う。



第51図 I 地点土壠図 $S = 1/40$

層 序

本地点は、土壠の直上にあたる。東西トレンチの東端部分2m余を、土壠に直交する形で深掘りし土壠の構築状況をみた。南北トレンチは、土壠に平行する形で設定したものである。

南北トレンチ

第1層 茶褐色粘質土層 粘性があり、小石が少し含まれる。

第1a層 灰色土層 10mmほどの小石やガラス、わら、コンクリート塊など、旧建物の廃棄物の含まれる土層である。

第2a層 灰褐色土層 粘性がなく5~20mm程の石が多く含まれる。

第3a層 赤褐色粘質土層 粘性・しまりがあり堅い。小石が少量含まれ、鉄分が酸化しているため赤味を帯びるが3層に近い。本層が土壠中央部の最上層である。

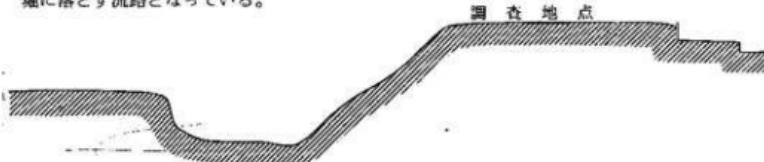
検出遺構

(1) 土 壈

本発掘地点は、松木堀に囲繞された梅翁曲輪の西側の、南北に走る土壠の直上にあたる。調査前の現状地形からも、明確にそれと判断され、西側土壠のはば中央部に位置する。

土壠の構築状況を確認するため、東西トレンチの東側を土壠の基底部に至るまで掘り下げた。この部分の土壠断面の観察から、粘土質の土層をつき固めながら盛り上げたことがうかがえる。明らかに土壠構築のために盛られた土層は、第2層から第15層まで14に区分が可能であり、2.5mの厚さを測る。深掘り部分は、土壠の東肩の部分であり、その東側の傾斜は30~35度を測る。

土壠の規模は、第52図に示したように、土壠上の平坦部の幅は12mで、松木堀は現在も水をたたえているが、調査区西側ではなくカラ堀となっている。現在では主郭の堀の水を松木堀に落とす流路となっている。

第52図 I 地点土壠エレベーション図 $S = 1/300$

(2) 磁石

土壘の基底下にあ 東西トレンチ

たる第16層と17層中に、2個の磁石が確認された。地表下270~280cmの地点である。径30~40cmで、厚さは5~10cmと平板状であり、上面は平坦である。この第12層の上面は、当時の生活面であると思われ非常に堅い面である。第16層は、炭や灰が混ざる粘土質の土層であり、白磁片・土師質皿形土器片・瀬戸焼菊皿片などがみられ、ほとんど遺物を含まない土壘構築上層と対称的である。この遺物や磁石の存在から、梅翁曲輪構築以前にも中世末武田時代の生活面が存在することが判明した。

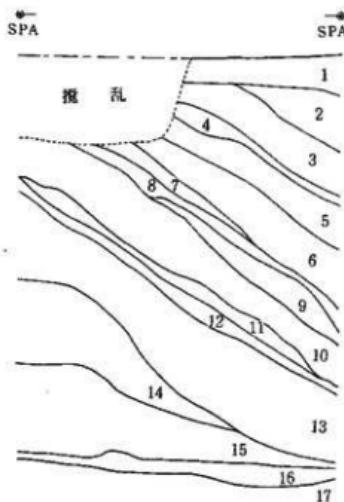
遺 物

(1) 出土状況

本地点の出土遺物は、すべて南北トレンチと東西トレンチの交差する深掘り部分からの出土である。土壘を立ち割ったこの調査地点からは、第13層以下の土壘の盛り土の中ほどより下部からの出土である。特に土壘の基底下に存在する礫石のある第16層からは、かわらけや陶磁器等9割以上が含まれていた。

(2) 土師質土器（第53図・写真同版30）

皿と鉢の小片がある。1は口径9.1cm、底径3.5cm、高さ2.3cmを測る。厚手の作りである。4は、口径10.4cm、底径5.6cm、高さ2.1cmを測る。淡橙褐色を呈し、底部は糸切りの後、擬高台風に底部縁辺部に粘土が付されている。3は、やや薄手の個体で、口径10.9cm、底径6.2cm、高さ2.0cmを測る。外面は、黒変している。本地点の土器は、白色・赤色粒子が中位に混ざるほか、やや少なめに雲母が混入されている。

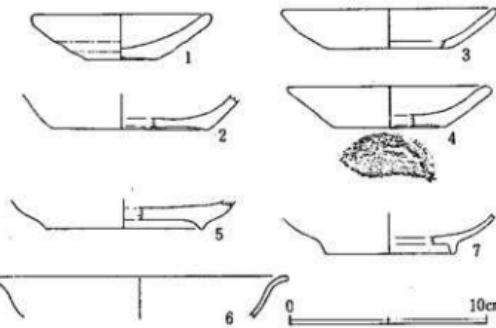


第53図 I 地点土壘セクション図
(部分) S=1/40

(3) 陶磁器 (53図
5~7・写真図版30)

陶磁器は3点出土している。すべて土器基底下の礎石がのる第16層からの出土である。5は、美濃産の灰釉皿の底部破片である。底径8.0cmを測り、薄緑色の釉薬がかけられている。釉薬は、釉だまりをなす内面などの観察により気泡が多く、嵌入が著しく

入っている。白褐色の軟らかめの素地である。6は口径15.1cmを測り薄手である。7は高台部底径6.6cmを測る。焼き上がりの状態や色調など、両者は類似しており同一個体である可能性もある。中国の福建省か広東省あたりの南支地方で焼かれた白磁である。



第54図 I地点出土遺物

第4章 まとめ

(1) 梅翁曲輪について

武田氏館跡は、永正16（1519）年川田館から移り、天正9（1581）年新府城に移転するまでの60余年間、武田信虎、信玄、勝頼と三代の居館となり、領国經營の中心であった。

館の構造は複郭形式をとり、東・中・西輪の中枢的部分に北側の北曲輪、南の梅翁曲輪が付設されている。桜井成広氏藏の古図によると、初期の段階では単郭であったらしく、現在の武田神社が存在する曲輪の中央部が土塁によって仕切られ、東曲輪・中曲輪と二分されていた。曲輪内の建物の配置が詳しく記載されていることは、内部構造を知る上で興味深い。写真図版31の恵林寺藏の「甲州古城勝頼以前闇」では、西曲輪と北曲輪が新たに付設されている。この古図の添書に、「平岩七之介築 添曲輪ハ………（以下略）」とあり、中曲輪と西曲輪の南に来る梅翁曲輪が、平岩親吉の時に付設されたことがうかがえる。平岩親吉は、武田家の滅亡後、甲州を領有した徳川家康の城代をつとめた人物である。梅翁曲輪まで描かれている武田氏館跡の古絵図は、写真図版32に示した武田神社藏2点と、山梨県立図書館蔵の2点、中沢泉氏藏1点のほか、浅野文庫蔵の1点などが存在する。梅翁曲輪の梅翁は、様王・梅王とも書かれる。これらの古絵図を総合して梅翁曲輪を概観すると、館跡の主郭をなす東・西の曲輪の南側堀を共有し、南側に「凹」字状に堀が繼續する曲輪である。曲輪の規模は、堀の内側の端から端まで、東西約175m、南北85mを測る。堀幅は、梅翁曲輪西側の松木堀で約15m、南側で約16mの幅をもつ。東側と南側1/4位の部分は、埋め立てられて、現在宅地となっている。

この梅翁曲輪のある位置は、恵林寺藏の古絵図に「典厩」と記されている。典厩とは、武田信玄の弟武田左馬介信繁のこと、氏の屋敷が存在していたことが推察される。

この梅翁曲輪内の発掘調査によって、多くの遺構が検出されている。これらの遺構の中には重複関係を有するものがあり、梅翁曲輪として堀や土塁が整備された以前の時期のものも確実に存在する。その1つは、C地点の調査によってたちわった土塁の基底下に、池や堀などの水底にたまる泥が中世末の遺物を伴って存在した点と、さらにこの層の下面の酸化鉄の固まった部分の直下に埋葬人骨が存在した点である。I地点でも、土塁の基底下に遺物址の一部と見なされている磁石や16世紀代の陶器などが出土している。このように直接土塁下の遺構の存在のほか、F地点の暗渠と配石、G地点の水路と溝など遺構の重複するものがあり、少なくとも二時期にわたる造営が認められる。

梅翁曲輪にあたる位置は、古絵図等の対比や発掘調査の結果から、武田時代は武田信繁など武田親族衆の屋敷跡であったものが、武田滅亡後の平岩氏の代に土塁や堀が築造されて蔵前の庁所となつたと解される。

(2) 土師質皿形土器について

A～I地点において全体の器形がつかめるもの（口径・底径・器高が測定できるもの）は73点に及ぶ。その内大半（70点）はF地点とG地点から出土したものであるため、両地点のものを中心に小論を進めたい。

両地点の土師質皿形土器（搬入によると思われるものを除く）の共通点としては、内面及び外面体部にロクロによる横ナデ整形が行われ、底部に糸切りを施し、それ以外の整形痕がほとんど見られない点があげられる。しかし両地点のものは同じ梅翁曲輪内でありながら胎土の含有粒子の割合（G地点のものは雲母を多量に含み赤色粒子・白色粒子は微量であるが、F地点のものは、G地点のものに比べ雲母は少なく、赤色粒子・白色粒子は多めである）、色調などに異なった傾向を持ち、また法量的にもF地点にはI類が存在しない点など差が見られる。

a類はII B類を中心としているが、他の類にも広く及び、数的には半分弱をしめている。またG地点のII Ba類は、II Bb類に比べ黒変部分をもつものが少ない傾向があるようである。

県内における土師質土器の発生は11世紀後半とされており、以来近世に至るまで生産し続けられてきたものであるが、まとまった資料を提供している遺跡は現在のところ非常に少ないといえる。そんな中で、本県における土師質土器の編年研究は、以前から行われており、末木健氏と坂本美夫氏によって案が出されている。編年の根拠としては館などの存続期間や伴出する陶器類などがあげられているが、それ以前の条件として各遺跡ごとの土器の形態的な規格性が強いことに基づいていると思われる。（伝）岩崎氏館跡からは多量の土師質皿形土器が出土しており、器形から見ると確かにばらつきはあるが、（伝）岩崎氏館跡を代表する形態があり、編年に用いられている。しかしF地点及びG地点出土の土師質皿形土器は、胎土については地点ごとに類似しているものの、形態については当然全体的な傾向はあるわけであるが、代表する器形を選ぶには難があり規格性に乏しい觀を受ける。

土師質土器は地域性がきわめて強い土器といわれ、本県においても編年的な研究がますます進むことが望まれる。また形態的な流れをうと同時に、同時期においても異時期においても類似する土器はその地域どうし、あるいは館どうしを有機的に結びつける資料となりうることを合せて考えたい。生産、流通も含め今後の課題といえる。

- （註1） 坂本美夫他 「シンボジウム奈良・平安時代土器の様相（第Ⅱ版）」『神奈川考古』14
 （註2） 末木健一 「平安時代以降の土師質土器の編年について—山梨県北巨摩郡明野村出土土器を中心として—」『信濃』第28巻9号 1977
 （註3） 坂本美夫 「山梨県に於ける15世紀以降の土師質土器編年—塙川村寺尾山出土品を中心に—」『甲斐考古』20の1 1983
 （註4） 山崎全夫他 「（伝）岩崎氏館跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会 1977
 （註5） （註3）に同じ

参考文献

- 山口市教育委員会 『大内氏館跡』 I ~ IV 1981~1982
大江正行 『群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿』『群馬考古通信』 1980
白山四丁目遺跡調査会 『白山四丁目遺跡』 1981
動坂遺跡調査会 『動坂遺跡』 1978
小山田遺跡調査会 『小山田遺跡群』 VI 1984
山梨県教育委員会 『勝沼氏館跡調査概報』 I ~ III 1975~1978
" 『(伝) 岩崎氏館跡発掘調査報告書』 1977
上田市教育委員会 『塙田城跡』 第2次発掘調査概要 1977
愛知県陶磁資料館特別展 『近世城跡出土の陶磁』 図録 1984
磯貝正義他 『日本城郭大系』(長野・山梨) 1980
桜井成広 『戦国名将の居城』 1981
松平定能編 『甲斐国志』
福田信夫 『武藏国分寺跡出土の土師質土器について』『東京考古』 2 1984
坂本美大 『山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論』『甲斐考古』 12の 2
末木健 『平安時代以降の土師質土器の編年について』『信濃』 28—9 1977
齊藤忠編 『中世の考古学』
甲斐叢書 『甲斐軍鑑』
甲府市教育委員会 『甲府の歴史と文化』 1981
葛西城址調査会 『青戸・葛西城址調査報告』 III 1975



B レンチ



A・B レンチ



A 地点発掘調査 レンチ

図版2



調査前



調査風景



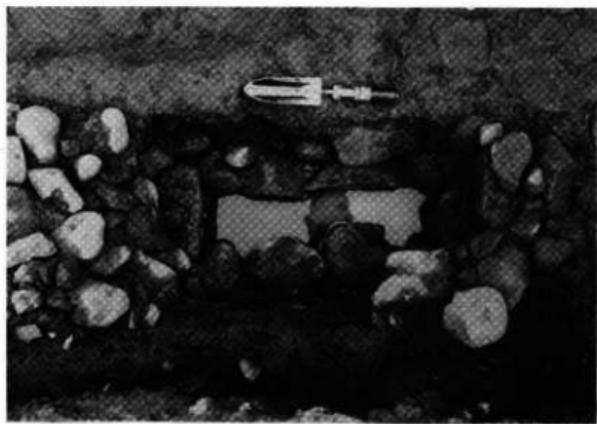
調査途中



調査風景



B 地点発掘調査区等



B 地 点 1 号 暗 渠

図版4



B トレンチ調査途中



検出状況



蓋石除去

B 地点 2 号 暗渠

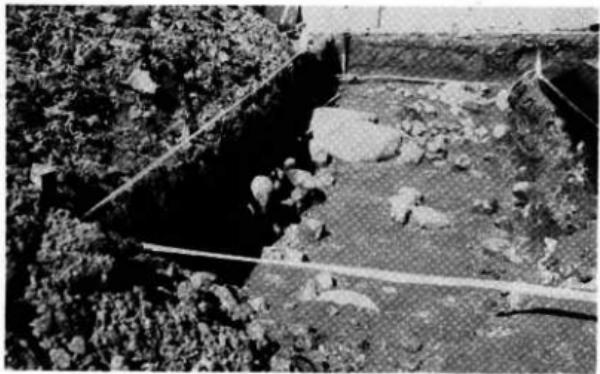
図版5



調査前



C・Dトレンチ北東より



B 地点 C・D トレンチ

図版6



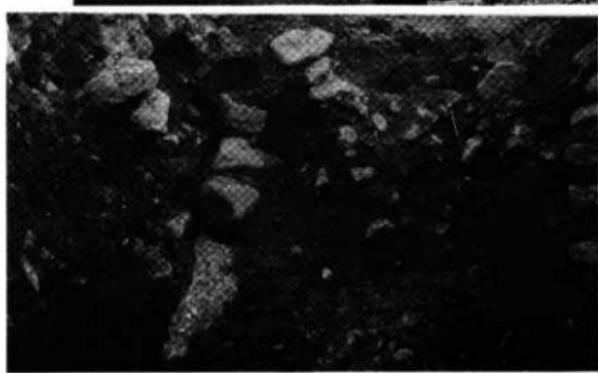
C 地 点 調 査 区 状 況



A トレンチ北側



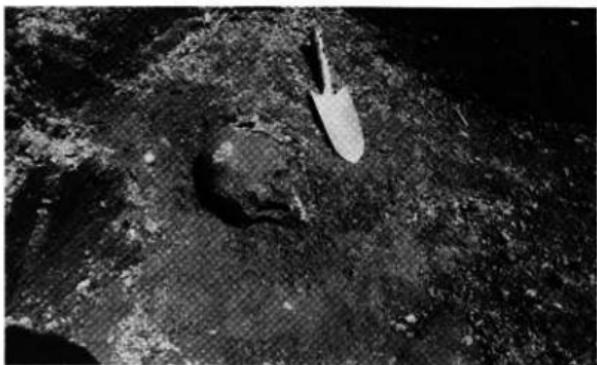
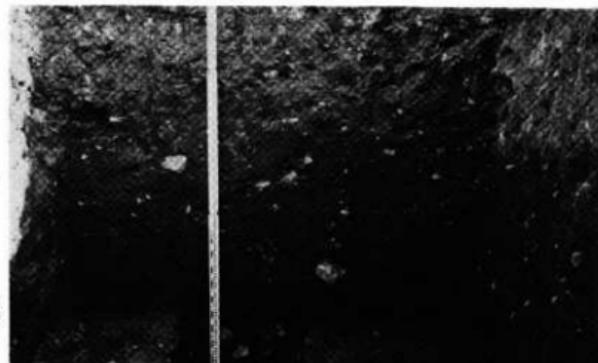
B トレンチ
西壁と土塁
北側の石垣



B トレンチ東壁

C 地点 B トレンチ等

図版8



C 地点 A トレンチ等

C地点出土遺物



実測風景

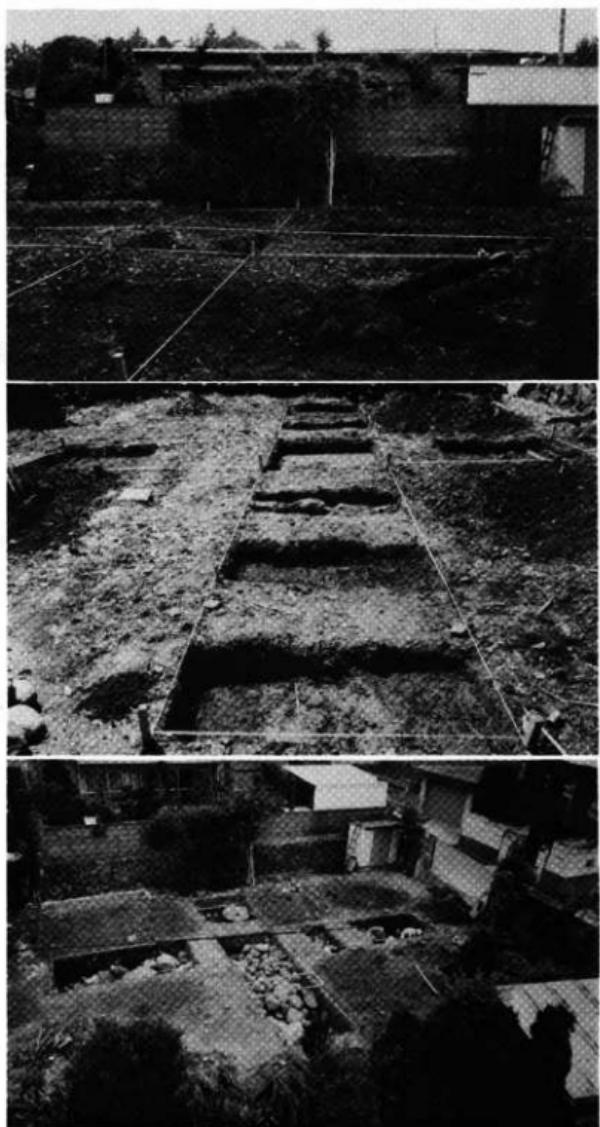


調査区西側の土壁



C 地 点 出 土 遺 物 等

図版 10



トレンチ設定状況

調査途中

調査区全景

D 地点 調査区 全景



D 地 点 A ト レ ン チ

図版12



B・C トレンチ（東より）



C1 トレンチ



B トレンチ



C2 トレンチ



B トレンチ

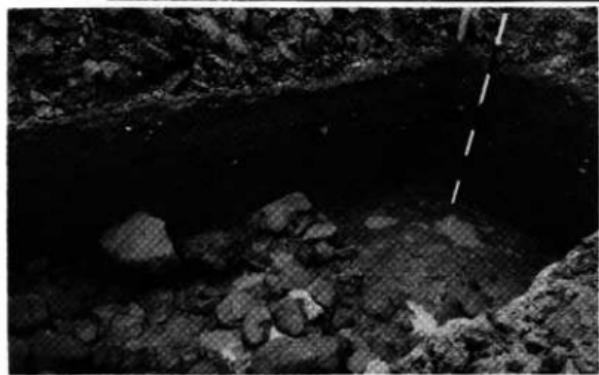


C2 トレンチ

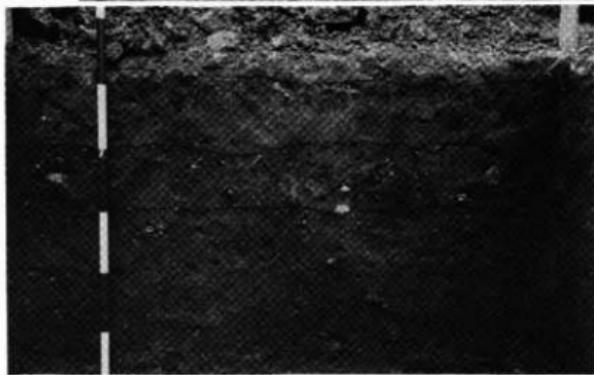
D 地点 B・C トレンチ



トレンチ設定状況



調査区
(北東より)



調査区西壁

E 地 点 調 査 区

図版 14



E 地点発掘調査状況等



A トレンチ



炭化物・土器検出状況



重機による掘削



調査地点南掘削底部



調査地点南斜面の矢竹(蓀竹)

図版 16



暗渠西から



暗渠東から



暗渠中央蓋石部分

F 地 点 暗 渠



暗渠西側

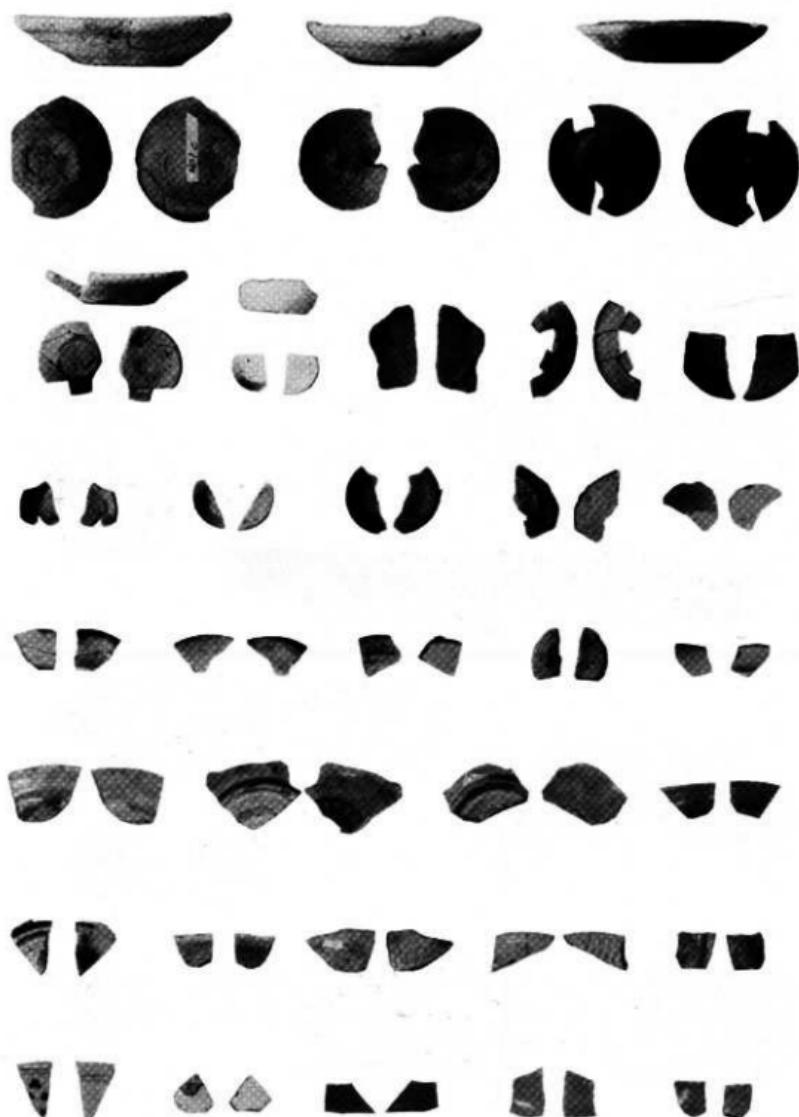


石段状遺構（南から）

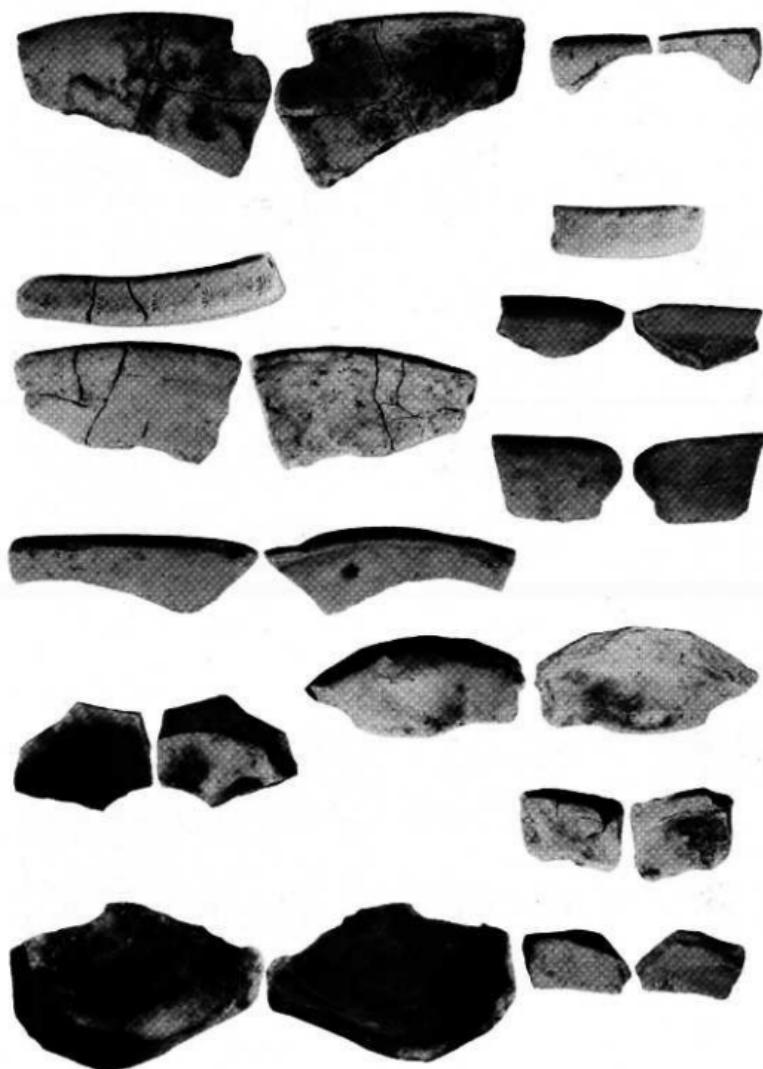


F地点西側配石遺構

図版18



F 地点出土かわらけ・陶磁器



F 地 点 出 土 火 鉢 類

図版20



水路西より



水路東より



水路中央部分

G 地 点 水 路



G地点溝検出状況



溝土層断面

G 地 点 溝 (1)

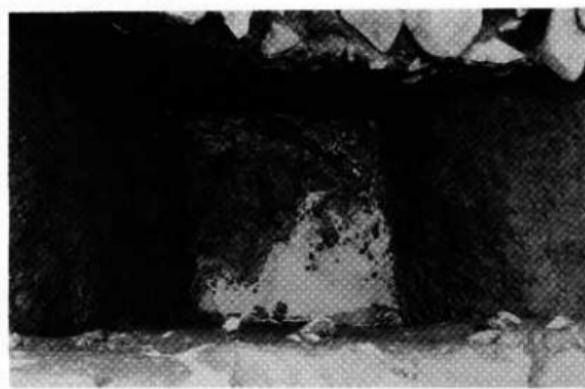
図版22



溝上部



清検出状況



溝掘り上がり

G 地 点 溝 (2)



土師質土器



菊 盆



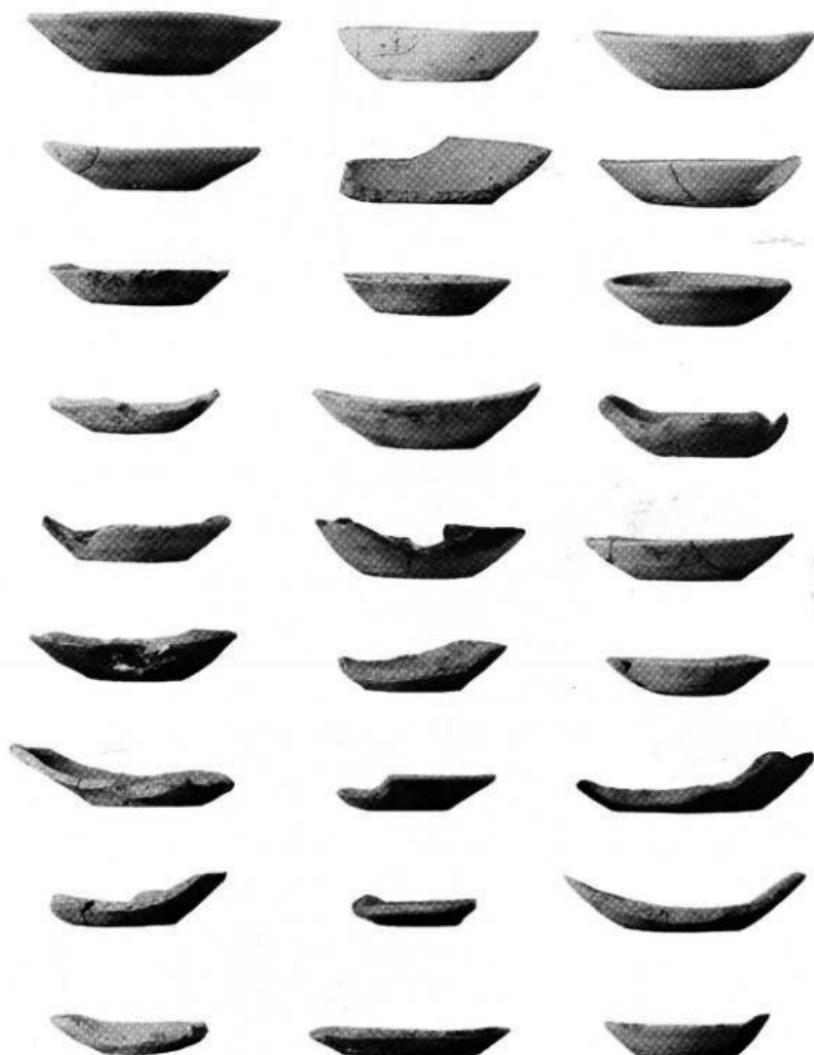
土師質土器

G 地 点 遗 物 出 土 状 況

図版24



G 地 点 出 土 遺 物 (1)



G 地 点 出 土 遗 物 (2)



G 地点 発掘 調査 状況

圖版27



H地点出土遗物



完掘状况



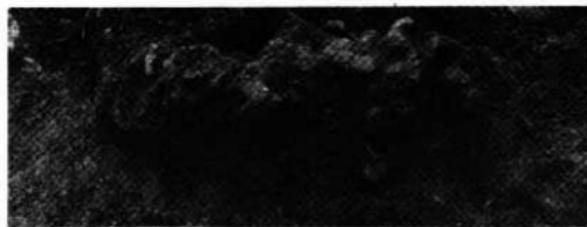
調査風景

H地點出土遺物等

圖版28



北東部集石



中央部燒土塊



南東部集石

H 地 点 檢 出 集 石 等

図版 29



土壌土層断面



調査前



南北トレンチ



実測風景



東西トレンチ



調査風景

I 地 点 調 査 区 等

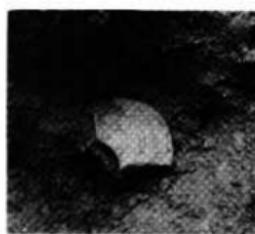
図版30



調査区深掘り部分



出土遺物



土師質土器出土状況

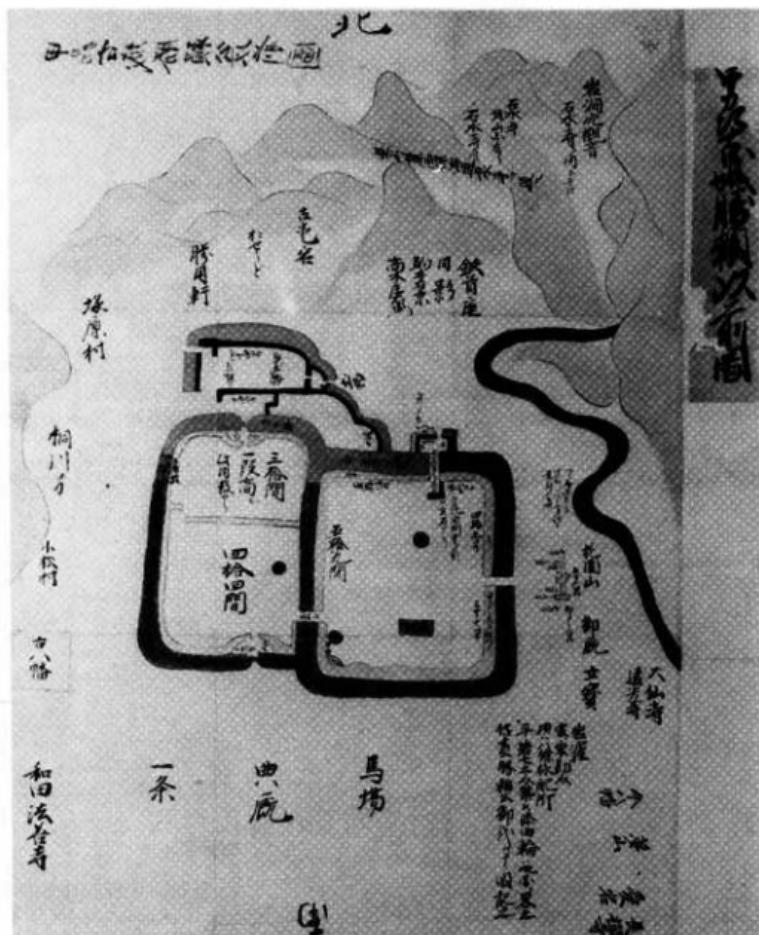


陶器出土状況



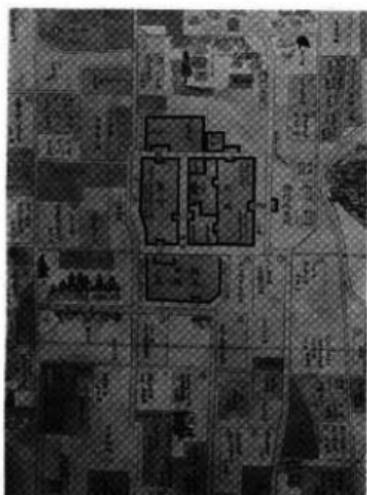
白磁出土状況

I 地 点 出 土 遺 物 等

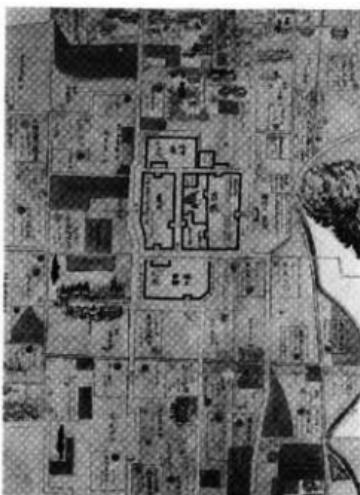


甲州古城勝類以前圖（惠林寺藏）

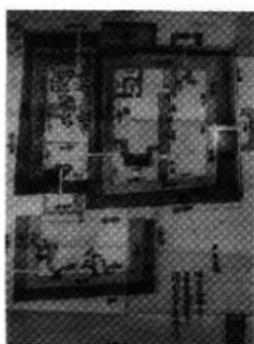
図版32



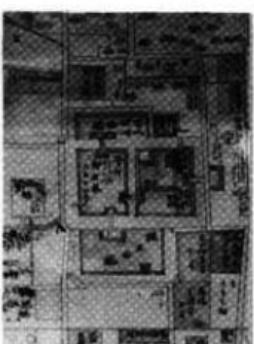
貞享3(1686)年(武田神社蔵)



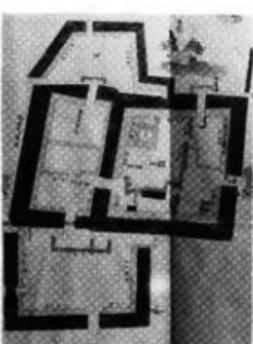
(中沢泉氏蔵)



年代不明(県立図書館蔵)



宝曆11(1761)年(県立図書館蔵)



年代不明(武田神社蔵)

甲府市文化財調査報告 2
山梨県甲府市
史跡 武田氏館跡 I

昭和55～57年度発掘調査報告書

昭和 60 年 3 月 31 日発行

編集・発行 甲府市教育委員会
〒400 甲府市丸の内 1-18-1
TEL (0552) 37-1161 (内線583)
印 刷 刷 機 平和プリント社

